

川邦彦・山県 登・吉田幸人・和田弘昭

以上を承認。会員現況は以下のとおり

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1986年8月31日	885	13	7	905
入会	9	0	0	9
退会	22	0	1	23
1986年12月31日	872	13	6	891

2. 春季シンポジウムについて

*野崎評議員からの報告を了承した。実施は東京大学教養学部で1987年4月6日(月)10時~17時。懇親会は、17時30分から。

*会員外への宣伝に努めることとした。

3. 選挙管理委員会の設置について

*委員長に佐藤和郎評議員，委員に清水 洋・松久幸敬各評議員を選出した。

4. 岩石・水相互作用国際集会の剰余金(250万円)について，前例どおりの条件で，預託をうけることとした。

5. 学会賞の運用について

*受賞者選考細則等検討委員会からの「日本地球化学会学会賞等受賞者選考細則」の原案を一國副会長から説明。受賞候補者の推薦期日を毎年3月10日とする修正をくわえ，同細則を定めた。

*会長の提案による受賞者選考委員会委員長の委嘱について承認した。

*上記細則の規定にかかわらず，本年にかぎり以下の措置を特例的にとることを承認した。

○本年度の受賞者選考委員会委員の委嘱については，会長および同委員会委員長に一任する。

○本年度の受賞者選考は，日本地球化学会奨励賞についてのみ行うこととし，3月末日を期限とする会員からの受賞候補者の推薦受付を実施すること。

*日本地球化学会奨励賞受賞者には，講演をお願いすることは予定せず授賞の対象となった研究について『地球化学』誌に書いていただく。

6. その他

*IGBP，1988年度年会開催地，本会25周年などについて自由に意見を交換した。



編集者 松久幸敬

〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 鉱床部
電話 0298 (54) 3636

発行所 日本地球化学会

〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内
電話 東京03 (817) 5801

振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 112

1988. II. 12

1988年度日本地球化学会春季シンポジウム

主催 日本地球化学会

日時 4月7日(木) 10:00~17:00

会場 東京大学教養学部

東京都目黒区駒場3-8-1

(電話03-467-1171, 内線629 綿拔邦彦)

コンビーナ 綿拔邦彦・小倉紀雄・野崎義行・松久幸敬・大隅多加志

プログラム

午前の部 (10:00~11:50)		4) 海嶺における熱水活動と海洋地殻
あいさつ	10:00~10:10	——ODP Hole504B と Troodos Ophiolite, Cyprus
日本地球化学会会長 一國雅巳		15:20~16:10
1) 外洋大気中に存在する有機化合物の分布と		川幡穂高(地調)
その地球化学的意義	10:10~11:00	5) 南極・火山・地震——地球物理学の視点から——
河村公隆(都立大理)		16:10~17:00
2) 北太平洋上大気の大気成分:		神沼克伊(極地研)
NO ₃ ⁻ , ⁷ Be, Al, ²²² Rn	11:00~11:50	
植松光夫(北海道東海大)		懇親会(於 生協食堂) 17:30~19:00
ポスターセッションおよび昼食	11:50~14:00	懇親会に参加ご希望の方は，同封のはがきにてシン
午後の部 (14:00~17:00)		ポジウム事務局(東大教養 綿拔邦彦)までお申込み
3) 炭酸カルシウムにみられるイオン置換反応		ください。申込み締切 3月22日(火)。なお，会費
一國雅巳(東工大総合)		は当日会場にてお支払いください。会費 4,000円
休憩	15:00~15:20	ポスターセッション
		本年度からポスターセッションによる研究発表を公
		募いたします。発表ご希望の方は，シンポジウム事務
		局(同上)まで，発表者名と標題，および連絡先を記
		してお申込みください。申込み締切 3月22日(火)。

1988年度の日本地球化学会年会および総会は，10月12日(水)~14日(金)の期間，広島大学(広島市)で開催されます。本年は日本地球化学会発足25周年に当たりますので，皆さん奮ってご参加下さい。

「日本地球化学会学会賞，奨励賞」受賞候補者推薦の募集

応募期限 3月31日（木）

日本地球化学会授賞規定により，学会賞および奨励賞受賞候補者の推薦を募集いたします。

つきましては，下記ご参照のうえ会員各位のご関係で適当と思われる受賞候補者をご推薦下さるようお願いいたします。

記

候補者の資格：

（学会賞） 地球化学の分野で特に優秀な業績を収めた本会会員。

（奨励賞） 1953年4月2日以降に生まれた本会正会員（学生会員を含む）で，地球化学の進歩に寄与するすぐれた研究をなし，なお将来の発展を期待しうる者。

募集の方法：本会会員の推薦による。

推薦の方法：所定用紙に記載した推薦書1通に，推薦

理由書，説明資料を添付して3月31日（木）までに学会事務所へ（当日消印有効）。

提出先：〒113 東京都文京区弥生2-4-16

日本学会事務センター内

日本地球化学会 受賞者選考

委員会

☆推薦書は同封の所定用紙もしくはこれを複写したものをご使用下さい。なお，この件についてのお問い合わせは本会庶務担当幹事（下記）まで。

〒153 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学教養学部化学教室 高野穆一郎

電話（03）467-1171 内線629

年 月 日

日本地球化学会（学会賞，奨励賞）受賞候補者推薦書

日本地球化学会授賞規程により，下記の者を日本地球化学会（学会賞，奨励賞）受賞候補者として推薦します。

推薦者

氏名

印

記

会員からの手紙

Geochemical Journal 編集長の交替にあたって

地質調査所 松久幸敬

1988年度より，一國雅巳現会長に替って，私が Geochemical Journal（以下G.J.）の編集を担当することになりました。今回は，編集長の交替だけではなく，永年 Managing editors として G.J. を支えてこられた小穴進也名誉会員と杉崎隆一会員のお二人も勇退されるということで，編集の体制を大幅に立てなおさなければなりません。そこで，その点について会員の皆様のご理解とご協力をお願いしたく，筆を執った次第です。

G.J. は，日本地球化学会の研究活動を外に向って知らせる窓口であると同時に，地球化学・宇宙化学の分野をカバーする国際誌であることを目指しています。しかし，実情は，どちらかというと虻蜂取らずのところがあって，毎年の年会で250件からの講演がひしめいているのに，G.J. に載る論文は，海外からの投稿も含めて年に40編足らずという歩止まりの悪さです。一方，国際誌としての評価も，勿論先人たちの並々ならぬ努力で質的に高い水準を保っているとは思いますが，世界の earth science のマーケットの中で占める比重という点では，正直のところ，いま一歩というところでしょう。とはいっても，編集を引き受けた者があまりベシミスティックでいるわけにもいきません

から，このへんを少しでも改善できたらと思っています。私としては，第一に，会員諸氏の潜在的 contribution を掘り起こす努力をするとともに，アジア・太平洋地域の新しいマーケットを開拓することを考えています。

編集体制としては，Associate editors の責任分担制を取り入れようと考えています。地球化学を構成する専門分野は多岐に互っており，とても一人の人間の能力でカバーできるものではありません。編集と印刷に関する最終的責任は編集長が負うにしても，各論文に対するレフェリーの選定，採否の決定，投稿の勧誘にあたって，各専門分野の Associate editors の意見を大幅に取り入れる体制にしようと考えています。Associate editors は日本から7人，外国から3人，の10人くらいを考えています。外国人の Associate editors には我々日本人のスタッフと同じレベルで積極的に編集実務に携わってもらえる，若い人たちを考えています。そのほかに，Editorial advisory board なるものを設けて，G.J. に対する意見や助言を述べてもらったり，各国や各地域における G.J. への投稿勧誘や購読拡大の窓口になってもらう考えです。

G.J. は英文誌ですので，英語は，投稿者にとっても編集者にとっても，大きな問題です。ご承知のように，今までは，すべての原稿が最終段階で小穴先生の英文校閲を受けてから印刷にまわっていました。そのお陰で，G.J. は，論文の英語の質がそろっており，

研究題目

（ふりがな）
氏 名

生 年 月 日

現 住 所

勤務先（職名）

最 終 学 歴

略 歴

添 付 書 類：

推薦理由書（様式自由：A4判横書きで，2000字程度）

説明資料（論文別刷その他審査の参考となる資料）

英文誌として国際的に受け入れられる水準を保っていました。はじめに書きましたように、今後はこのようなサポートがなくなるわけですし、また、いずれにせよ、このようなサービスは、いつまでも個人の負担に頼るべきものではないでしょう。そこで、私としては、“新体制”下で G.J. に投稿して下さる方々に まず第一にお願いしたいことは、英文原稿をよくするために、あるいは少なくとも understandable にするために、ご自身の多少の時間とお金を割いていただきたいということです。具体的には、投稿前に、必ず、身近な英文に堪能な研究者か、あるいは、英文添削を業とする専門家に原稿を見てもらうことをお願いします。もし英文添削業者をご存知ない方がいらっしゃる場合は、私共の方でご紹介しますのでお申し出下さい。

G.J. の編集にまつわる色々な問題は、2 年前の「日本地球化学会ニュース」No.106 に載った“Geochemical Journal をよくするために”の中で、一國さんと杉崎さんが縷々述べておられます。中には論文の内容以前の問題が色々あって、この記事は、あとから編集を引き継ぐ者を discourage するものです。ご自分で編集や印刷に携わった経験をお持ちでない方の中には、“どうにかなるだろう”という考えで、適当なところで手を打って投稿してくる方がいらっしゃるようですが、それは、道路や公園は“自然に”きれいになるものと信じて平気でゴミを捨てる人の心理に似ています。自分がやらなかったものは、“どうにもならない”ので、ゴミはそこにあり続けると思って下さい。

今、G.J. は、慢性的な発行の遅れとそれによる投稿数の減少の悪循環、そして、円高による海外販売価格の高騰と購読者数の頭打ちの問題をかかえています。会員の皆様のご協力によってこれらの問題を克服し、G.J. の新たな発展を期したいと思いますので、よろしくお願いいたします。



○1987年度日本地球化学会奨励賞決まる

本会の第1回奨励賞は、佐野有司会員（東京大学理学部）の「ヘリウム同位体比に関する地球化学的研究」に決まり、1987年度総会において表彰が行われました。

○シンポジウム“隕石と太陽系の起源”開催のお知らせ

標記シンポジウムが重点領域研究「太陽系の起源」総括班、地球電磁気・地球惑星圏学会の共催、地球化学会後援で1988年4月25日（月）に郵政省電波研究所（東京、小金井）において開催されます。

参加希望者にはプログラムをお送りしますので下記へ連絡して下さい。なお、発表希望者は4 pages以内の abstract（A 4 版、1 inch margin, Title, Name + Affiliation, the text in English）をできるだけ早くお送り下さい。

連絡先：東京都文京区弥生2-11-16

東京大学理学部地球物理学教室 杉浦直治

Tel: 03-812-2111 ext.4307

Fax: 818-3247

○Sixth International Symposium on Water-Rock Interaction

標記国際集会 WRI-6 が1989年8月3日から8月8日まで6日間連合王国の Malvern で開催されます。実行委員長は英国地質調査所の W.M. Edmunds 博士です。尚当初の計画では7月27日より8月1日まで Bath で開催の予定でしたが事情により変更となりました。8月9日より12日までイギリス西南部を訪れ、化石地熱地帯、花崗岩—水反応、hot-dry-rock、堆積、土壌および海洋地球化学をテーマに巡検旅行をする計画です。

WRI-6 に出席を希望される若手研究者5-7名に往復旅費全額と滞在費の一部を贈呈する用意があります。贈呈者の選考は発表予定論文を選考委員の前で発表していただき、審査の結果決定します。応募できる方は WRI-6 実行委員会によってアブストラクトが受理された論文の第一著者に限りませんが、所属学会不問です。審査の時期その他の詳細はいづれ地球化学会ニュースその他に発表しますので奮って御応募下さい。尚この件に関する御問合せは東大・海洋研酒井（03-376-1251）まで。

「脳死に関する見解」採択される

— 医療技術と人間の生命特別委員会報告 —

昭和62年11月 日本学術会議広報委員会

総 会 報 告

日本学術会議は、去る10月21日から23日まで第103回総会（第13期・6回目）を開催しました。今回の「日本学術会議だより」では、今総会で採択された勧告を中心として、同総会の議事内容をお知らせします。本会議の第13期も、余すところ9か月となり、各委員会は、期の活動の取りまとめに向けて一層活発に審議を進めています。

総会第1日目の午前中には、会長からの経過報告、各部・各委員会報告に続き、勧告・対外報告等4つが提案され、そのうちの2件が可決された。そのほかの2件に関しては、同日午後には各部会で審議が行われ、第2日目の午前中に1件が、第3日目の午前中に1件が可決された。

なお、総会前日の20日午前には連合部会が開催され、これらの案件の予備的な説明、質疑が行われた。また第2日目午後には「食糧生産と環境」についての自由討議（詳細別掲）が、第3日目の午後には常置委員会、特別委員会が開催された。

第1日目午前。まず、利根川進氏のノーベル生理学・医学賞受賞に対し日本学術会議第103回総会の名において祝電を呈することが提案され、全員一致で可決された。

次に日本学術会議の行う国際学術交流事業の実施に関する内規の一部改正についての提案がなされ、これも賛成多数で可決された。この改正は、第14期の当初3か月間における、国際学会への研連委員の代表派遣について、必要な経過措置を講ずるものである。

続いて、高齢化社会特別委員会提案の「日本高齢社会総合研究センター（仮称）の設立について」（勧告）（詳細別掲）の提案説明と質疑応答が行われた。さらに、医療技術と人間の生命特別委員会報告「脳死に関する見解」を「日本学術会議の運営の細則に関する内規」に定める対外「報告」として認めることに関する提案が行われた。これは同特別委員会がその発足以来2年間にわたって審議を重ねてきたものであり、前回4月の総会では討論の過程でさらに検討する必要があるとして同特委により取り下げられたものである。その後、委員定数を増加するなどして審議を重ね、今総会に再度提案されたものであるが、批判的意見を背後に含む多くの質問が出された。

第2日目午前。前日提案された「日本高齢社会総合研究センター（仮称）の設立について」（勧告）が、賛成多数で採択され、直ちに内閣総理大臣始め関係諸機関等に送付された。同じく前日提案の「脳死に関する見解」は、前日の部会審議で異論が続出したため、抜本的に書き改められたものが提案されたが、なおいくつかの疑問が示され、採決には至らなかった。

第3日目午前。再度修正された「脳死に関する見解」が提案された。国民的合意の形成、医学界における少数意見の存在などに関して、なお理解の不一致があり、質問討論が行われた。これら若干の点に関する討論者間の相互了解を遂げた後、数名の発言者から再度の修正を経ることによ

って本報告は異なった専門分野のいずれからみてもおおむね満足できるものになった、当初に危惧した点が除かれた、などの意見が述べられた。こうして多少の曲折はあったが、最後に本提案がほぼ全員一致で採択された。（見解の内容は別項参照）

日本高齢社会総合研究センター（仮称）の設立について（勧告）

急速な高齢社会への移行という厳しい問題をまえにして、日本学術会議は既に昭和55年（1980年）11月1日「国立老化・老年病センター（仮称）の設立について」の勧告を内閣総理大臣あてに行なった。しかし現在にあつては、さらにこれに加えて、高齢社会をめぐる新しい理論的研究と政策開発の推進が緊急の課題となっている。そこで、このような課題を解決するために、日本学術会議は下記構想のごとき「日本高齢社会総合研究センター（仮称）」の設立をここに勧告するものである。この研究センターは、「老化・老年病センター」と緊密な連携を保ちつつ、高齢社会・高齢層・高齢者問題の総合研究を目指す、人文・社会科学中心の全国的なネットワーク型の研究センターである。

「日本高齢社会総合研究センター」（仮称）の構想「日本高齢社会総合研究センター法（仮称）」という法律に基づく独立性の高い法人とし、国の出資による基金を基礎として設立される。なお、所管官庁の選定に当たっては、21世紀の重要な国民的課題たる高齢者政策の総合性を考え、特定の行政分野に偏ることなく、全行政分野が連携を保ち得るような所管の在り方が望まれる。

総合研究センターの運営は以下に行う。(1)本研究センターは、国の出資による基金を基礎として設立されるが、さらにまた一般寄付、並びに研究受託費を加えて、弾力的に運営されるところの公的で全国的なネットワーク型の研究センターとする。(2)本研究センターの運営を統括する理事会を構成する理事の半数は研究者をもって充てる。(3)研究課題の選択は、関連学会（例えば、日本学術会議の選定による）から推挙され、一定の任期をもつ30名前後の「研究評議員会」で行うことによって研究の総合性を図るとともに、また研究評価をも行う。(4)専任研究員制度（一定の任期を設ける）を置き、それにより総合研究センターの研究の組織化並びに相互調整を行う。各プロジェクト毎に専任研究員を中心に流動研究員（客員研究員、出向研究員等）やその他の研究者を募ってこれに加え、常時300名程度の研究者が活動している状態が望ましい。（詳細は、日本学術会議月報11月号を参照されたい。）

脳死に関する見解

— 医療技術と人間の生命特別委員会報告 —

最近の医療技術の発展に伴って生じてきた人間の生命とその尊厳にかかわる諸問題のうち特に脳死の問題は末期医療、臓器移植等をめぐって大きな社会的問題となっている。医療の現場では脳死の状態に陥った多くの患者をめぐって、日夜その家族や医師が苦悩に満ちた対応を迫られつつある。脳死の問題は、必ずしも心臓や肝臓などの臓器移植との関連においてだけでなく、むしろ現実的には多くの場合、末期医療の現場において深刻化している。このような現状にかんがみ、脳死にかかわる諸問題を様々の角度から十分に議論し、問題の所在を考察して、その解決への展望を示したものである。これが本特別委員会の今回の報告である。

本報告は脳死を医学的に、法的にそして心理的、倫理的及び社会的側面から考察した。全脳の機能が不可逆的に喪失した状態と定義される脳死は、医学的にみて個体の死を意味する。これは第7部会員の一致した意見であり、医学界の大勢と判断されるが、医学界の中にも少数ながら疑義を持つ者もある。脳死を人の死と認めるか否かについては、法的にはこれを肯定、否定する見解が対立している。否定している場合にも脳死になった際、人工呼吸器を外してはならないということではなく、事情によっては違法性阻却ないし、責任阻却事由があり得ることまで否定するものではない。

人の死は単なる医学的現象ではなく、その人の人格、社会的存在にもかかわるものである。したがってその取扱いについては、本人の生前の意思、家族の感情、一般的倫理観、習俗、社会的慣習等を尊重しなければならない。しかし脳死をめぐっては三徴候に基づく伝統的な死の概念にとらわれることなく、深刻化している医療の現状に対処して新しい死の概念の確立に努めるべきであろう。このため関係方面において脳死をめぐる諸問題が検討され、速やかな解決への展望が開かれることを希望する。

以上の見解を第103回総会の承認を得て対外報告としてこれを公表することとした。（詳細は、日本学術会議月報11月号を参照されたい。）

自由討議 食糧生産と環境一

この自由討議は、今期設置された「生物資源・食糧と環境特別委員会」のメンバーが主となり、個人の立場で、食糧生産と環境の問題について意見を発表したものである。会長近藤次郎（食糧に対する環境からのアプローチ）、第6部、生物資源特委委員長阪本楠彦（食糧問題の展望）、第6部（以下すべて特委委員）武田友四郎（環境変化が農業生態系に及ぼす影響）、第5部岩佐義朗（水資源の立場から）の各会員がそれぞれに付記したサブテーマについて問題を提起した。これに続いて第3部大石嘉一郎（経済学の立場から）、第1部石川栄吉（数量主義の反省）、第6部水間豊（畜産学の立場から）、第2部及川伸（食糧管理制度について）、第6部福場博保（栄養面から見た食糧資源開発問題）、第1部水津一朗（歴史地理学の立場から）、第7部小泉明（人口と食糧・環境）の各会員から関連発言があり、質疑応答が行われた。

1973～81年頃のいわゆる“世界食糧危機”は既に去り、今や食糧の輸出競争が激化している。しかしアフリカ等の飢餓問題が解消したわけでは決していないし、開発途上国の所得増から来る食糧需要は決して楽観を許さない。まるで、栄養過剰の大団に“追いつき、追い越そう”としているかのようでさえある。

生産の面でも、自然の節理を無視した増産が進められている。森や山に住む神々への迷信的な怖れを失った後、自然破壊に対してかけろべき有効な抑制力を、人類はまだ見出せずにいる。破壊された自然の復旧（砂漠の緑化など）もまだほとんどできないままである。（この自由討議は日学双書5刊として出版されます。）

日本学術会議月報

日本学術会議は、その日常的な活動の状況を科学者や学術研究団体を始め関係諸機関・団体等に広く理解してもらうため、毎月1回、「日本学術会議月報」（B5版・6～12ページ）を発行し、無料で配布している。

その内容は、総会の決定事項、運営審議会の審議事項、研究連絡委員会の開催状況、関係学術研究団体と共同主催する国際会議の開催状況、後援する国際会議及び研究連絡委員会等が主催するシンポジウム・講演会のお知らせ等を中心として、その折々のトピック事項を掲載している。また、会員の随筆なども取り入れ、なるべく読み易い紙面となるよう努めている。

現在、当「月報」を送付している機関・団体等は、次のとおりである。

大学・短期大学、関係国・公・私立研究機関、公立図書館、関係省庁、関係報道機関、日本学術会議広報協力学術団体*等

* 本会議活動の周知を図るとともに、各学術分野との緊密な連絡・協力関係を維持・強化するため、本会議の広報活動に協力してもらう学・協会

第14期日本学術会議会員選出のための登録学術研究団体の概況

本会議では、現在第14期（昭和63年7月22日～昭和66年7月21日）会員（定員210人）選出のための手続きが進められているが、先頃6月末日を締切期限として、学術研究団体からの登録申請が受け付けられた。その後日本学術会議会員推薦管理会で審査が行われたが、結果は次のとおりであった。

学術研究団体の登録申請の審査結果

申請団体数……………900団体

登録団体数……………836団体

* 日本学術会議会員推薦管理会に登録した836団体名は「日本学術会議月報」11月号に掲載されるので、ご参照願いたい。

日学双書「高度情報社会の展望と課題」

日本学術会議第101回総会における自由討議「高度情報社会の展望と課題」の記録及び「高度情報社会特別委員会」のヒアリングを編集し、日学双書No.3として刊行されました。

日学双書No.3「高度情報社会の展望と課題」

1部 1,000円（送料250円）

（問い合わせ先）

〒106東京都港区西麻布3-24-20

交通安全教育センター内

（勤）日本学術協力財団

郵便振替

（口座番号）東京4-27458

（勤）日本学術協力財団あて

多数の学術研究団体の御協力により、「日本学術会議だより」を掲載していただくことができ、ありがとうございます。

なお、御意見・お問い合わせ等がありましたら下記までお寄せください。

〒106 港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会

（日本学術会議事務局庶務課）

電話 03(403) 6291

○第25回理工学における同位元素研究発表会開催のお知らせ

この研究発表会の目的は、異なった専門分野の研究者が一堂に会し、同位元素および放射線の利用の技術を中心とした研究、およびその技術の基礎となる研究の発表と討論を行い、各専門分野間の知識と技術の交流を図ろうとするもので、日本地球化学会も共同主催者のひとつです。

なお、発表は口頭発表（1件15分以内、原則としてOHP使用）とポスター発表（90cm×150cm×2枚）とします。

会期：昭和63年7月4日（月）～7月6日（水）
会場：国立教育会館（東京都千代田区霞が関3-2-3文部省となり）

発表者の資格：発表申込者が所属する主催学・協会の年会（大会）等の規定または慣例に従います。

発表申込み：所定の申込書（1件1通）によりお申込み下さい。所定の申込書は下記あて請求して下さい
〒113東京都文京区本駒込2-28-45

日本アイソトープ協会内
理工学における同位元素研究発表会運営委員会
Tel (03) 946-7111 (代) 内線261

発表申込締切：昭和63年2月29日（月）必着
講演要旨：講演要旨集を発行します。発表申込みがあり次第、所定の原稿用紙をお送りします。口頭発表ポスター発表とも1件原稿用紙1枚です。

講演要旨原稿締切：昭和63年4月15日（金）必着

○1987年度日本地球化学会総会報告

総会議事次第

1. 開会宣言
2. 議長選出
3. 会長挨拶
4. 年会実行委員長挨拶
5. 1986年度事業報告ならびに決算報告
6. 監査報告
7. 1987年度事業中間報告ならびに会計中間報告
8. 日本学術会議会員候補者・推薦人の選出について
9. 1988年度事業計画ならびに予算案
10. 1988-1989年度役員選出結果
11. 学会賞（奨励賞）の授与
12. その他
13. 閉会

1987年度日本地球化学会総会は11月6日（金）東邦

大学において16時から17時に開催された。出席者は約60名であった。議長に坪田博行氏（広島大学）が選出された。事業および決算報告ならびに1988年度の事業計画と予算案は承認された。8. の日本学術会議（第14期）会員候補者・推薦人の選出については増田会長から「12月に予定している新旧合同評議員会において新旧両評議員の合議によって決めたい」旨の提案があり了承された。総会席上1987年度日本地球化学会奨励賞が佐野有司会員に授与され、賞状ならびに記念メダルが増田会長より手渡された。

1986年度事業報告

1. 会員状況	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1985年12月31日	879	13	7	899
入会	30	0	0	30
退会	37	0	1	38
1986年12月31日	872	13	6	891

2. 年会、委員会等開催数
年会1回（10/11-13：富山大学）、総会1回（10/12：富山大学）、評議員会4回（2/1, 6/14, 10/10, 12月持回り）、幹事会5回（2/1, 4/1, 9/6, 10/2, 12/6, 東京）、会誌編集委員会4回、ニュース発行委員会3回、行事委員会3回、広告委員会2回、IGBP委員会1回
3. 会誌発行
G.J. Vol.20 (1-6), 地球化学 Vol.20 (1, 2)
4. ニュース発行
Nos.106,107,108 (計 46ページ)
5. 学会共催
第23回理工学における同位元素研究発表会
6. 例会
6/14 希土類元素の地球化学：新旧の話題 増田彰正氏

1986年度決算報告書

収 支 決 算 書
(自1986年1月1日 至1986年12月31日)

収入の部	円 (予算, 円)
1. 会費	6,965,823 [6,600,000]
正会員	6,022,000
学生会員	282,000
賛助会員	210,000
海外会員	392,823

入会金	59,000
2. 刊行物売上	5,100,311 [5,000,000]
別刷	854,489
Back No.	4,245,822
3. 広告料	551,000 [500,000]
4. 助成金	1,350,000 [1,500,000]
5. 雑収入	214,442 [30,000]
6. 前年度名簿積立金	0 [0]
7. 国際会議預金利息	57,609 [60,000]
8. 前年度繰越金	2,910,992 [1,000,000]

計 17,150,177 [14,690,000]

支出の部

1. 事業費	円 (予算, 円)
出版費	4,065,740 [9,300,000]
印刷	2,419,400
編集	900,000
発送	746,340
行事費	215,000 [270,000]
名簿積立金	250,000 [250,000]
名簿作成費	0 [0]
会員業務委託費	1,188,962 [1,450,000]
会員業務郵税	102,090 [170,000]

小計 5,821,792 [11,440,000]

2. 管理費	
庶務費	200,000 [200,000]
会議費	207,195 [200,000]
通信費	15,000 [30,000]
旅費	132,000 [300,000]
選挙費	0 [0]
雑費	15,230 [100,000]
会誌保管料	171,600 [171,600]

小計 741,025 [1,001,600]

3. 予備費	0 [500,000]
4. 基本財産充当引当金	500,000 [500,000]
5. 次年度繰越金	10,087,360 [1,248,400]

計 17,150,177 [14,690,000]

(注：次年度繰越金には1986年度発行出版物の印刷費未納分の約400万円を含む)

貸借対照表

(1986年12月31日現在)

資産の部	
現金	17,319円
預金	4,441,363
学会事務センター	9,141,678
計	13,600,360

負債・正味財産の部	
負債	3,513,000円
前受会費	2,763,000
名簿積立	250,000
基本財産充当引当金	500,000
正味財産	10,087,360
計	13,600,360

1987年度事業中間報告

1. 会員状況	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1986年12月31日	872	13	6	891
入会	22	0	0	22
退会	15	1	0	16
1987年9月30日	879	12	6	897

2. 年会、委員会等開催数
年会1回（11/5-7：東京）、総会1回（11/6：東京）
評議員会3回（2/7, 6/20, 11/4）、幹事会2回（3/28, 9/26, 東京）、会誌編集委員会4回、ニュース発行委員会3回、行事委員会3回、広告委員会2回、IGBP委員会2回、学会賞受賞者選考委員会1回
3. 会誌発行
G.J. Index Vol.21(1), 地球化学 Vol.21(1)
4. ニュース発行
Nos.109,110,111 (計 38ページ)
5. 学会共催
第24回理工学における同位元素研究発表会
6. 春季シンポジウムおよび懇親会
4月6日 東京大学教養学部
7. 名簿発行
8. 学会賞の授与（奨励賞1件）
9. 1988-1989年度役員選出

1987年度会計中間報告 (1987年 6 月30日現在)

収入の部

科目	金額 (円) (予算, 円)
1. 会費収入	6,114,700 [6,600,000]
2. 刊行物売上	2,545,931 [4,300,000]
3. 広告料	162,600 [300,000]
4. 助成金	0 [1,350,000]
5. 雑収入	6,122 [30,000]
6. 前年度名簿積立金	250,000 [250,000]
7. 前年度基本財産充当引当金	500,000 [500,000]
8. 国際会議預金利息	0 [0]
9. 前年度繰越金	10,087,360 [3,200,000]
計	19,666,713 [16,530,000]

支出の部

科目	金額 (円) (前年度予算, 円)
1. 事業費	
1. 1. 出版費	4,658,431 [9,950,000]
1. 2. 行事費	305,000 [270,000]
1. 3. 学会賞経費	13,000 [100,000]
1. 4. 名簿積立金	0 [0]
1. 5. 名簿作成費	0 [600,000]
1. 6. 事務委託費	300,000 [1,600,000]
1. 7. 会員業務郵税	25,178 [200,000]
事業費小計	5,301,609 [12,720,000]
2. 管理費	
2. 1. 庶務費	200,000 [200,000]
2. 2. 会議費	71,182 [270,000]
2. 3. 通信費	9,600 [30,000]
2. 4. 旅費	176,000 [300,000]
2. 5. 選挙費	0 [80,000]
2. 6. 雑費	41,620 [80,000]
2. 7. 会誌保管料	0 [171,600]
管理費小計	498,402 [1,131,600]
3. 予備費	0 [500,000]
4. 基本財産充当引当金	500,000 [500,000]
5. 次年度繰越金	— [1,678,400]
計	6,300,011 [16,530,000]

1988年度事業計画

1. 年会 1回 (広島)
2. 総会 1回 (広島)
3. 春季シンポジウム (東京)
4. 評議員会 3回
5. 幹事会 3回
6. 会誌発行
G.J. Vol.22(1-6)
地球化学 Vol.22(1,2)
7. ニュース発行
Nos. 112,113,114
8. 学会共催
第25回理工学における同位元素研究発表会
9. 日本学術会議第14期会員の候補者・推薦人の届出
10. 学会賞受賞者の選考
11. その他

1988年度予算

収入の部

科目	金額 (円) (前年度予算, 円)
1. 会費収入	6,600,000 [6,600,000]
2. 刊行物売上	4,600,000 [4,300,000]
3. 広告料	200,000 [300,000]
4. 助成金	1,300,000 [1,350,000]
5. 雑収入	20,000 [30,000]
6. 前年度名簿積立金	0 [250,000]
7. 前年度基本財産充当引当金	500,000 [500,000]
8. 国際会議預金利息	0 [0]
9. 前年度繰越金	5,500,000 [3,200,000]
計	18,720,000 [16,530,000]

支出の部

科目	金額 (円) (前年度予算, 円)
1. 事業費	
1. 1. 出版費	9,650,000 [9,950,000]
会誌等印刷費	7,700,000 [8,300,000]
編集費	1,200,000 [900,000]
発送費	750,000 [750,000]
1. 2. 行事費	300,000 [270,000]
1. 3. 学会賞経費	40,000 [100,000]
1. 4. 委員会活動費	100,000 [0]
1. 5. 名簿積立金	300,000 [0]
1. 6. 名簿作成費	0 [600,000]
1. 7. 事務委託費	1,600,000 [1,600,000]
1. 8. 会員業務郵税	200,000 [200,000]

事業費小計	12,190,000	[12,720,000]
2. 管理費		
2. 1. 庶務費	200,000	[200,000]
2. 2. 会議費	200,000	[270,000]
2. 3. 通信費	30,000	[30,000]
2. 4. 旅費	300,000	[300,000]
2. 5. 選挙費	0	[80,000]
2. 6. 雑費	80,000	[80,000]
2. 7. 会誌保管料	171,600	[171,600]
管理費小計	981,600	[1,131,600]
3. 予備費	500,000	[500,000]
4. 基本財産充当引当金	500,000	[500,000]
5. 次年度繰越金	4,548,400	[1,678,400]
計	18,720,000	[16,530,000]

1987年度第2回日本地球化学会評議員会議事録

日 時: 1987年 6 月20日 15時~17時30分

場 所: 東京大学山上会館

出席者: 増田彰正会長, 一國雅巳副会長, 石渡良志, 大隅多加志, 梶原良道, 金森 悟, 木越邦彦, 佐藤和郎, 坪田博行, 中井信之, 野崎義行, 松葉谷 治, 松本英二, 綿抜邦彦 各評議員

議事にさきだって, 本日欠席の鎌田政明評議員に代わって坂元隼雄会員のオブザーバとしての出席を了承した。

I. 前回の議事録を承認した。

II. 報告事項

1. 庶務 (大隅評議員)
*昭和62年度文部省科学研究費補助金〔研究成果公開促進費〕の内定通知 (128万円) があった。
*名簿を作成する準備を進めている。会員宛に名簿記載事項を確認する受取人払いのハガキを送付する予定。
2. 会計 (清水評議員に代わって大隅評議員)
*昨年度決算の監査を受けているところである。
3. 編集 (一國副会長)
*G.J. Vol. 21(1) については印刷が近日中に完了す

る。Vol. 1-20の Index を作製中である。

- *本年度になってからの投稿は13編。
(石渡評議員)
*『地球化学』へ投稿願いたい。掲載決定まで3カ月を目標にしている。
*投稿規程を整備した。内容は, ワープロ原稿の取り扱いと図表のサイズを明記したこと。第21巻1号に掲載する。
(松久評議員に代わって大隅評議員)
*ニュース111号は年会プログラムを掲載する。原稿締切は, 8月15日。

4. 行事 (相川評議員)
*1987年度年会は, 東邦大学内に準備委員会を発足させて実務を進めている。すでに講演申込を何件か受け付けている。
(綿抜評議員および野崎評議員)
*春季シンポジウムを4月6日東京大学教養学部において実施, 参加者は68名, うち大学関係49名, 国立研究機関11名, 民間企業関係8名であった。
*日程が, 海洋学会・火山学会と重なったが, これまでの例会とは異なる顔ぶれの参加が得られ好評であった。宣伝に努め, 会員以外にも開かれた催しであることを明確にすれば今後参加者は増えるであろう。

III. 議事

1. 入退会 (大隅評議員)
*入会 (7名)
柏森伸子, 坂本 浩, 坂元隼雄, 篠原 功, 田口 勇, 原口紘丞, 中村 真
*退会 (13名)
貴志晴雄, 木村真人, 児玉剛則, 立松英信, 飛田 修作, 豊田英義, 平野英雄, 藤巻 稔, 本多 彪, 松倉公憲, 谷津栄寿, 渡瀬次男, (株)三啓社<賛助会員>

以上を承認。会員現況は以下のとおり

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1986年12月31日	872	13	6	891
入会	7	0	0	7
退会	12	1	0	13
1987年4月31日	867	12	6	885

2. 学会賞授賞について
*受賞者選考委員会委員長の木越評議員より, 日本地

球化学会奨励賞選考結果の報告を受けた。[ヘリウム同位体比に関する地球化学的研究]により佐野有司会員に対して本年度の日本地球化学会奨励賞を授与することを決定した。

*総会において表彰を行うこととした。ニュースの記事とすること・和文誌に寄稿を求め掲載することは表彰の後に行うこととした。

3. 年会講演者の資格について

*[少なくとも会員を1名は含むこと]といった制限を従来より設けていないことを確認。実際上は会員外からの講演申込には入会をお願いするといった対応が望ましいとの意見が出された。

*年会の開催地に任されているとの慣行を確認したが、年会の案内(ニュースおよび『化学と工業』誌)に[原則として]という形で講演者の資格を明示しておかない限り会員以外の講演申込を断ることは難しいとの指摘があった。

4. 1988年度年会開催地について

*広島大学坪田博行評議員が引き受けて下さることとなった。中国・四国地域では、はじめて。学内での会員数も増やして取り組む予定であるとのこと。

5. IGBP について

*本会の IGBP 委員会幹事松本英二評議員より、日本学術会議地球化学宇宙化学研究連絡委員会から本会に対して要望されている IGBP に日本から参加する研究課題の提案について検討を開始した旨の報告を受けた。また会長より IGBP 委員会に対し本年度活動費として10万円程度の支出を認めたい旨、提案があった。

*今後具体的な研究提案を本会が行なった場合には、活動費の支出が多額になってくると本会内部での地球化学の他分野との調整が必要になってくるとの指摘があり、IGBPへの取り組みには、本会の部会活動活性化の一環としての位置づけも必要であることが議論の中で確認された。

*活動費については、会計担当評議員・監事の判断を尊重しつつ本会の正式の機関である IGBP 委員会の活動に必要な支出であれば10万円程度を目安に認めることが了承された。

6. 日本学術会議第14期会員の選出について

*本会からの日本学術会議会員候補者の推薦の前提となる学術研究団体登録の申請について庶務担当の大隅評議員から、第13期における経緯を含めて説明があり、登録申請を行なうことを了承した。

*本会における候補者および推薦人選定の手続きについては、幹事会で検討し総会へ評議員会からの提案ができるように準備をすることとした。

7. その他

*AGU meeting の日本開催に関する他学会の動静について、紹介があった。

*来年度春季シンポジウムについては、東京大学教養学部を会場にすることを了承し幹事会で検討を進めることとした。

1987年度第3回日本地球化学会評議員会議事録

日 時: 1987年11月4日 17時30分~20時

場 所: 大森東急イン

出席者: 増田彰正会長、一國雅巳副会長、相川嘉正、秋山雅彦、石渡良志、大隅多加志、梶原良道、金森 悟、兼岡一郎、川辺岩夫、木越邦彦、佐藤和郎、清水 洋、杉崎隆一、坪田博行、中山英一郎、野崎義行、松葉谷治、松久幸敬、松本英二、水谷義彦、綿坂邦彦 各評議員、鳥居鉄也監事

I. 前回の議事録を承認した。

II. 報告事項

1. 幹事会(大隅評議員)

*G.J.誌1988年(Vol.22)海外講読価格を140米ドルとした。国内価額の値上げ率(20400円から24000円へ)と同率の値上げである。

*日本学術会議第14期会員の選出において本会が推薦人として指名し届け出ることができる人数(2名以内)を、[2名を希望]として日本学術会議へて回答することとした。

2. 庶務(大隅評議員)

*会員名簿を発行した。会員以外への売価は5000円。
*日本学術会議会員推薦管理会より、本会が学術研究団体として登録された旨の通知を受けた。

*G.J.誌 Index については、1987年度会員および Vol.21の講読者へ無料配布した。今後の入手希望に対しては1冊5000円で応ずることとした。

3. 会計(清水評議員)

*IGBP 委員会へ10万円の支出を認めた。

4. 編集

(一國副会長)

*G.J. Vol.21(2)については11月半ば発行予定。

*Vol.1-20の Index を10月5日発行した。活用願いたい。

*本年度になってからの投稿は26編。

(石渡評議員)

*『地球化学』21巻2号は12月半ば発行予定。

*投稿規程を整備し、第22巻1号に掲載する。
(松久評議員)

*ニュース111号は年会プログラムを掲載、9月22日に発行した。

5. 行事

(相川評議員)

*1987年度年会(東邦大学)参加申込状況は、講演249件(うち課題講演35件)・参加登録302人・懇親会参加191名(うち学生36名・名誉会員招待4名)である。

(綿坂評議員および野崎評議員)

*1988年度春季シンポジウムを明年4月7日東京大学教養学部において開催予定である。実行委員会を組織して企画に当たりたい。

6. IAGC 関係(木越評議員)

*10月24・25日のチューリッヒでの IAGC 委員会に出席した。IAGC Newsletter を媒体としての本会との情報交換の申し入れがあった。

*日本から提案していた国連大学に地球化学のプログラムを取り上げさせる運動について IAGC としても取り上げて協力するとのことであった。

III. 議事

1. 入退会(大隅評議員)

*入会(15名)加賀谷隆子・川田邦明・合田耕一・渋谷明貫・島村 匡・杉浦直治・鈴木和博・宗林由樹・園田 朗・高久雄一・徳岡麻比古・原川裕章・松原佳代・松本哲一・真野裕幸

*退会(3名)秋山勝芳・岡崎和彦・影山邦夫
以上を承認。会員現況は以下のとおり

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1987年4月31日	867	12	6	885
入会	15	0	0	15
退会	3	0	0	3
1987年9月30日	879	12	6	897

2. 役員選挙結果について

*選挙管理委員会の佐藤評議員から以下の報告を受けこれを承認。投票総数170、うち有効投票数154。役員選出細則にしたがって1988-1989年度本会役員として会長・副会長・監事各1名、評議員21名を選出した。

*役員選出細則上で選挙権を持つ会員の範囲が明確で

ほるぶの英米人スタッフを
あなたの語学助手にご利用下さい

HOLP

English Language Adviser

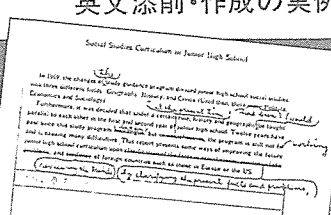
●研究論文
学術論文の
英文を添削する

●研究論文、
学術レポート英訳
要約英文をつくる

●ビジネススピーチ
英語のスピーチ
挨拶状、礼状
などを書く

●英文パンフレット
解説書その他
各種の和文英訳

ランゲージ・アドバイザーによる
英文添削・作成の実例



●ある大学教育学部教授の英文作成と添削

基準料金(高度に難解なものは割増になります)			
英文添削	英文原稿 A4 25行	3枚まで	3,000円
		4枚以上 1枚につき	1,000円
英文和訳	英文原稿 A4 25行	1枚につき	3,000円
和文英訳	日本語原稿 400字詰	1枚につき	4,000円

ご依頼は電話でも郵便でもファックスでも

英文を書いたけれど自信がない、この文章では失礼に当たらないだろうか、正しい英語の表現は…とお悩みの方、また、正確でしかも格調高い英文が迅速に欲しい方に、Language AdviserのNative Check(英語を母国語とするひとのチェック)をおすすめします。スタッフは日本語が堪能ですから、日本語で相談ができます。

お申し込み
お問い合わせは

ほるぶ教育開発研究所 03(354)2815・8371 FAX 03(354)9202
(株)ほるぶ総連合 〒160東京都新宿区新宿2 19 13 サカセンビル

ないとの指摘が清水評議員からあり、次期の評議員会への引継事項とすることとした。

3. 1987年度日本地球化学会総会について

*大隅評議員より、次第の説明があり了承した。

4. 1986年度事業および決算報告について

*大隅評議員・清水評議員から説明があり、了承した。

5. 1987年度事業および会計中間報告について

*大隅評議員・清水評議員から説明があり、了承した。

6. 1988年度事業計画および予算案について

*大隅評議員より事業計画の説明があり、学会賞の選考を明示する修正を加え、総会提案原案としてこれを了承した。

*清水評議員より予算案の説明があり、これを了承した。

7. 日本学術会議第14期会員の選出について

*総会に対して、会員候補者および推薦人を12月に行われる予定の新旧合同評議員会において決定する旨の提案を会長より行うこととした。

8. その他

*AGUから日本のEarth Scienceの各団体と提携関係を持ちたい旨のアプローチがあった。今後1990年AGU meetingの日本開催をめぐって関係諸学会の間で種々の動きが予想される、との話題が提供され、この件については、次期の評議員会へ引き継ぐこととした。

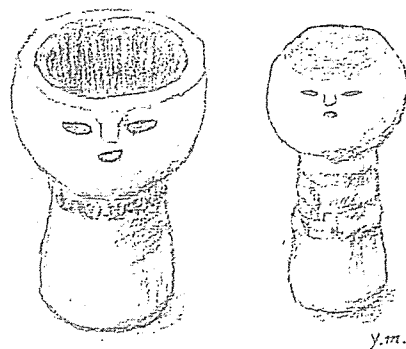
○日本地球化学会1988-1989年度役員

会長 一國雅巳

副会長 綿拔邦彦

監事 鳥居鉄也

評議員 石渡良志・大隅多加志・小倉紀雄・小嶋



稔・梶原良道・兼岡一郎・木越邦彦・日下部 実・
杉崎隆一・鈴木 款・高野穆一郎・田中 剛・角皆
静男・坪田博行・中山英一郎・野津憲治・増田彰
正・松葉谷 治・松久幸敬*・松本英二・水谷義
彦・柳 哮

*任期超過であるが、G.J.編集担当のため、会長指名により評議員会で承認。

会務担当幹事

Geochemical Journal 編集長 松久幸敬

〒305 つくば市東1-1-3

地質調査所鉱床部

電話0298-54-3636

「地球化学」編集長 石渡良志

〒158 東京都世田谷区深沢 2-1-1

東京都立大学理学部化学教室

電話03-717-0111

庶務 高野穆一郎

〒153 東京都目黒区駒場 3-8-1

東京大学教養学部化学教室

電話03-467-1171

会計 野津憲治

〒113 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学理学部地殻化学実験施設

電話03-812-2111

ニュース編集 鈴木 款

〒305 つくば市長峰 1-1

気象研究所地球化学研究部

電話0298-51-7111

行事 小倉紀雄

〒183 府中市幸町 3-5-8

東京農工大学農学部環境保護学科

電話0423-64-3311

編集者 松久幸敬

〒305 茨城県つくば市東1-1-3

地質調査所 鉱床部

電話 0298 (54) 3636

発行所 日本地球化学会

〒113 東京都文京区弥生2-4-16

学会センタービル (4F)

日本学会事務センター内

電話 東京 03 (817) 5801

振込先銀行 三井銀行上野広小路支店

普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 113

1988. V. 20

1988年度日本地球化学会年会

——25周年記念大会——

主催 日本地球化学会 共催 日本化学会

広島大学で開催！

日時 10月12日(水)～14日(金)

会場 広島大学総合科学部(広島市中区東千田町1-1-89)

講演 課題(1)沿岸海域の地球化学、2)環境放射能、3)自然災害の予測と防災—地球化学的アプローチ)および一般

ポスター 課題(地球化学研究と新技術)および一般。ポスター発表は十分な討論が行えるよう最終日の昼頃に討論時間をとる予定です。

講演申込み締切 6月25日(土)

同封の申込用紙を御使用下さい。

講演要旨締切 8月20日(土)要旨原稿用紙は申込み締切後送ります。

申込先 730広島市中区東千田町1-1-89 広島大学総合科学部 日本地球化学会年会準備委員会 坪田博行(電話(082)241-1221, 内線3570, 2215)

見学 工業技術院中国工業技術試験所(呉市広)の御厚意により、10月12日～15日の間、瀬戸内海大型水理模型を希望者は見学できます。詳細は追ってお知らせします。

年会風景の写真を募集します

日本地球化学会が設立されて25年になります。25周年事業の1つとして、過去の年会の風景やエキスカッションのスナップ写真などの展示会を企画しました。面白い写真、なつかしい写真を、下記により募集します。奮って御応募下さい。採用分には、展示した写真をお礼として差し上げます。

- 1) 地球化学研究会の時代も含めて募集します。
- 2) (なるべくならば) 原板または陽画。年度(不明の時は凡その年度)と場所など説明を付して下さい。
- 3) 応募作品は4つ切～8つ切に引き伸ばします。陽画の場合は複写後引き伸ばし、額に入れて展示します。(贈呈分には額は含みません)
- 4) 同じような作品が重なった時の選択は準備委員会が行います。応募作品は年会後に返送します。
- 5) 締切 8月27日(土)



日本地球化学会の 当面する課題

会 長 一國雅巳

どの学会でも何とかして会員を増やそうという努力をしております。その狙いは会員が増えれば会費の収入が増え、学会の経常的な活動が安定するとか、あるいは学術会議に会員の候補を出す上で有利であるとかいったものばかりでなく、どうしたら会員の年齢構成を若い方にずらすことができるかということにもあるようです。他の学会では会員を増やすために特別の委員会を設置したり、あるいは若手を対象とする研究集会を開催するなどそれぞれに工夫をしています。

我々の学会もこの数年会員数の伸びが芳しくありません。若い会員が入ってこないと必然的に会員の平均年齢は上がって行き、いろいろな企画も（熟年向きとはいわないまでも）中堅以上の層を対象としたものになり勝ちで、こうなりますと若い人はますます学会に近付かなくなり、この状態を放置しておけばこの学会は敬老クラブ的なものになってしまうでしょう。こうなってしまうのは手遅れです。

どうすれば若い人にとって魅力的な学会になるかということでは増田前会長も苦心しておられました。前会長のときから始まった春期シンポジウムの開催、学会賞・奨励賞の授与などは着実な成果をあげつつあります。私の仕事はこれらの事業を定着させ、それによって会の活動のレベルを一段と高めることであろうと思っています。

学会の重要な事業は会誌の発行と年会の開催ですが、そのような経常的な事業に加えて単発的な企画も必要です。今年の春期シンポジウムにポスターセッションを併設致しましたが、これもいろいろな行事が型にはまって行くことを防止することを意図したものです。現在の会員のみなさんが近くにおられる人を日本地球化学会の会員になるようにお勧め下さることと並行して会の事業について何かアイデアをおもちでしたら私なり評議委員なりにお知らせ下さい。実行可能な案であれば評議委員に諮って直ちにその実現に着手したいと思います。今期の評議委員会はこの方向で努力をしております。会員のみなさんの一層のご支援をお願い致します。

日本地球化学会春季シンポジウム

63年4月7日、第2回の標記シンポジウムが東京大学教養学部において開催された。プログラムは既に本会ニュースNo112に記載された通りであるが、今回はポスターセッションを行う事になり、次の6件の報告・発表があった。

当日は雨天であったが参加者は60余名で討論も活発で、新しい情報の交換に役立ったと思われる。昼休み2時間を利用したポスターセッションも有効にその役目を果たしたようで、今後もこのようなシンポジウムの開催を望む声も聞かれた。

懇親会には20余名が参加し、ゲストの国立極地研究所神沼克伊教授を囲み、地球科学談義が花を開いた。次年度は更に多くの方々参加を期待したい。

ポスターセッション

- #1 フロリダの地下水中の以上に高いPo-210
○原田晃（北大水産）・W.C. Burnett (Dept. Oceanography, Florida State Univ.)・J.B. Cowart (Dept. Geology, Florida State Univ.)
- #2 伊豆大島元町の小清水坑井付近でみられた異常な水温上昇について
○高橋正明・阿部喜久男・野田徹郎・風早康平・安藤直行（地調）
- #3 ホウケイ酸ガラスと海水の反応
○柳沢文孝・酒井均（東大海洋研）
- #4 二酸化硫黄によるポリチオン酸の分解—草津白根山湯釜のモデリング—
○藤原桂子・高野穆一郎・綿拔邦彦（東大教養）
- #5 イオン選択性電極による火口湖水中のポリチオン酸のモニタリング—火山噴火予知の基礎的研究—
○大沢信二・高野穆一郎・綿拔邦彦（東大教養）
- #6 マンガン団塊中のCe, Nd同位体比の研究
○天川裕史・清水洋・増田彰正（東大理）

○1988年 水圏地球化学若手会

- 1) 日 時 1988年10月14日（金）18:00~15日（土）12:00
- 2) 場 所 広島県勤労者福祉会館「みゆき会館」（広島大学より徒歩15分）

- 3) テーマ 今、海洋化学に求められるもの—他分野から見た海洋化学—
- 4) 話題提供者 藤岡 換太郎(海洋研), 上 真一(広大・生々), 上嶋 英機(中工試), 山本 学(広大・理)
- 5) 問い合わせ先 広島大学総合科学部 坪田研究室
下島 公紀(082)241-1221 (内2215)
- または 京都大学 化学研究室
宗林 由樹(0774)32-3111 (内2056)

地球化学会の集いに引き続いて開かれます。多数の参加を期待しています。

○1988年地球化学研究協会学術賞「三宅賞」の授賞候補者および研究助成受領候補者の推薦依頼

下記の推薦依頼がありました。

三宅賞

- (1) 本賞は地球化学に顕著な研究業績をおさめた科学者に贈呈します。
- (2) 本賞は賞状とし、副賞として賞碑および賞金(30万円)をそえます。
- (3) 所定の用紙に授賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(400字程度)、主な論文10編程度に略歴をそえて、協会事務所までお送り下さい。

研究助成

- (1) 研究助成は地球化学の若手研究者で、海外のシンポジウム等に出席し論文を発表する者に対して、行われます。
- (2) 助成金は1件10万円とし、年に3件までとします。
- (3) 所定の用紙に研究助成受領の推薦対象者となる若手研究者(各メ切日において満40才までとする)の略歴、研究業績、助成金使用の目的、出席予定の国際会議名(開催年月日、開催場所)、発表予定論文題目、推薦理由等を記入して、協会事務所までお送り下さい。

申込メ切

三宅賞: 1988年9月5日(月), 研究助成の第1回メ切1988年9月5日(月), 第2回メ切1989年1月末日。 申込先 地球化学研究会 〒166東京都杉並区高円寺北4-29-2-217, 電話03-330-2455。

○I. トヨタ財団研究助成

トヨタ財団では1988年度の研究助成を基本テーマ: 新しい人間社会の探究のもとに募集しています。本年度は次の2つの課題に重点が置かれています: ①高度技術社会への対応; ②多分化社会への対応。募集メ切は1988年5月31日(消印有効)。

○II. 「女性科学者に明るい未来をの会」よりの推薦依頼

「女性科学者に明るい未来をの会」より1988年度の賞(猿橋賞)受賞候補者の推薦依頼がありました。メ切日は1988年11月末日必着です。

I, II についての詳細は庶務幹事 高野穆一郎(東大教養) 電話03-467-1171内線629まで御問い合わせ下さい。

○第24回Chemical Abstracts利用法講習会

主催 化学情報協会 協賛
Chemical Abstractsの効率的な使い方を実例を挙げながら説明いたします。

日 時 昭和63年6月29日(水) 10時から16時
場 所 学士会東大分館(東京都文京区本郷7-3-1)

受講料(テキスト代含む) 一般21,000円, 大学教職員・学生・化学情報協会賛助会員・維持会員(1名まで)6,500円, 化学情報協会正会員の学協会会員14,000円

定 員 20名

申込先 化学情報協会講習会受付係(TEL. 03-816-3462)

○「地球化学ニュースを魅力的に」

地球化学ニュースを魅力的で、読まずにいられないものにするために、次号から、もっとたくさんの情報、意見をのせたいと思います。例えば、

- 1) 会員からの手紙(研究会の開催のお知らせ、地球化学をめぐる動向意見等)
- 2) 会員以外からの手紙(他分野)
- 3) 学会開催情報(どんな小さな集会でも可)
- 4) 研究室紹介
- 5) 書評
- 6) 国際的な動き
- 7) さがし物、求人、求職等、販売(Tシャツ、本等)

どんな記事でも送りください。

(気象研究所 鈴木款)

公開講演会開催さる

昭和63年2月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議では、学術の成果を広く国民生活に反映浸透させるという日本学術会議法の主旨に沿うため、公開講演会を開催していますが、今回の「日本学術会議だより」では、昨年11月に開催した2つの公開講演会の講演内容を中心として、本会議の国際的活動の概要等についてお知らせします。

公開講演会「ハイテクと人類の将来」

昭和62年度第1回目の公開講演会は、「ハイテクと人類の将来」という主題の基に、11月21日、京都市の日本イタリア京都都会館ホールで開催された。

最初に、近藤次郎本会議会長（経営工学）が、「誰が科学の進歩を停められるか—心臓移植からSDIまで—」と題して、まず、人口の増加によって示される人類の発展が科学の発展に支えられてきたことをあげた。一方では、日航機の墜落事故、TMIやチェルノブイリ原発事故、スペースシャトル爆発事故などにより多くの人命が失われたことを述べた。心臓移植などの生命科学の進歩が高度医療技術の倫理問題に関心を集め、SDI構想が宇宙の平和利用に新しい問題を提起しているなどを指摘した。そして、これからの科学・技術の発達には、人文・社会科学と自然科学の調和を図ることが大切であることを強調した。

次いで、関寛治本会議第2部会員（政治学、立命館大学教授）は、「ハイテク時代の学術ネットワークと平和の条件」と題して、新しい先端的な科学技術が実際に応用可能となってきたことに伴い、ハイテクを駆使したC&Cというネットワークが世界的に可能となり、複雑なネットワークから成る世界政治の構造に大きな変化をもたらしつつあることを指摘した。そして、このような状況を踏まえて、国家という壁を解決していかななくてはならないこと、そのためには、トロンの発想のコンピュータシステムを基礎として学術情報システムのより自由な地球規模の再編成を行えるようにすること、人間間ネットワークの高次化による国の外交政策の在り方の再検討をすることも重要であることを強調した。

最後に、鳥袋嘉昌本会議第3部会員（経営学、東洋大学教授）は、「人間と高度科学技術との調和」と題して、「高度科学技術の粋を集めた航空機」の事故を取り上げて、その大部分は人為ミスであることを指摘し、このような事故は、人間と高度科学技術の接点で、何らかのそごが生じて起きるものであることを指摘した。そして、現在人間と高度科学技術とをいかにマネージしていくかについて、十分な科学的分析と管理的配慮がなされていない。その最大の問題点は生命尊厳を基にした経営哲学の欠落であると指摘した上で、人間と高度科学技術との調和を可能にする総合科学の重要性を強調した。

公開講演会「情報化と国際化」

昭和62年度第2回目の公開講演会「情報化と国際化」が、11月28日、本会議講堂で開催され、各界各層より多数が聴講し、成功裡に終了した。

講演は、3人の演者による講演とそれに関連する質疑応答が行われた。

まず最初に、猪瀬博本会議第5部会員（情報工学、学術情報センター所長）が「情報技術と国際化」と題して、情報技術の急速な発展にふれ、歴史上未曾有の規模で産業構造転換を促し、世界の人々に革命的ともいえる意思疎通の手段を提供した情報技術は、また一方で情報の氾濫を引き起こし、貿易摩擦、雇用不安、情報の地域間格差、文化の画一化など多様な国際問題を発生させてもいると指摘した。コミュニケーションは、情報提供者と情報の受け手とのバランスが何より不可欠であるとし、それらを1）情報流通の問題、2）先端技術開発の問題、3）雇用の問題、4）文化の問題に分類し、スライドを交えて意見を述べた。

次に、竹内啓第3部会員（経済統計学、東京大学教授）が「情報化時代の国際政治・経済」と題して、国際的な情報流通を取り上げ、ますます大量にかつ急速に行われるようになる、その影響として経済・文化等が国際化から世界化・地球化（グローバル化）される傾向にある今日、一方では政治における国家主義、民族主義との矛盾が激化するであろうと指摘した。これからの国際的力関係は、情報力の量が大きく関係してくると思えられと意見を述べた。情報化は世界を一つにする基盤を与えることができるが、それには各国の協調が不可欠の条件であるとし、21世紀中頃には国境・国籍を意識しない望ましい時代がくるようになるかもしれない、と結んだ。

最後に、宇野政雄第3部会員（商学、早稲田大学教授）が、「企業の情報化と国際化」と題して、企業も個人と同様に真剣に情報化と国際化について考え、生き残るために取り組んでいることを、身近なコンビニエンス・ストアやクレジット（信販）会社を例にとり、具体的にわかりやすく解説した。昨今C.I.（コーポレートアイデンティティ）戦略が企業の経営戦略としてクローズアップされているが、どういう情報（ハード）を、どのように活用（ソフト）するのか、一番の課題であると力説した。

（なお、これらの講演会の講演内容は、日学双書として、財団法人学術協力財団から出版されます。）

二 国 間 学 術 交 流

本会議は、諸外国における学術研究の動向及び現状を把握するとともに、学術研究に関する基本的、全般的事項について相手国の科学者等と意見を交換することにより、我が国の学術研究の整合的な発展に寄与することを目的として、昭和58年度から毎年2か国へ代表団を派遣している。今までに、アメリカ合衆国、マレーシア、ドイツ連邦共和国、インドネシア共和国、スウェーデン王国、タイ王国、フランス共和国、大韓民国へ派遣したが、今年度は、11月7日から15日まで連合王国へ、12月1日から5日までシンガポール共和国へ、それぞれ会長または副会長以下7名の会員を派遣した。

日本学術会議第13期は、「学術研究の国際性重視と国際的視野の確立」をその活動の重要な柱の一つとしており、今回もその観点から交流を行った。

連合王国については、「連合王国の経済停滞とその対策」「産業革命以降の連合王国における基礎科学及び応用科学の発展」「日英のアカデミックな協力はどうあるべきか」の三つのテーマについて、行政機関、研究所、大学等を訪問し、情報交換を行い、さらにその方面の科学者と意見交換会を行った。

シンガポールについては、「今後のアジア・太平洋圏の科学協力における日本の役割」をテーマに行政機関、研究所、大学等を訪問し、情報交換を行い、さらにその方面の科学者と意見交換会を行った。

今回の成果は、代表団訪問時だけのものではなく、訪問国との今後の継続的な交流、緊密な情報・資料の交換、日本学術会議と訪問国関係各諸機関との相互理解の促進・緊密化等の形で表れてくるものであり、これらの成果は、我が国の学術研究の国際交流・協力の基本姿勢及びその抜本的充実方策を検討する場合の大きな資料として役立つものと期待される。

日本学術会議の国際的活動

本会議は、先に述べた二国間学術交流のほか、次のような国際活動を行っている。

国際学術団体加入

本会議は、多くの国際学術団体に加入し、密接な協力を保ち、国際的な学術の発展に努めている。昭和62年度現在、本会議が分担金を支払って加入している国際学術団体は、国際学術連合会議（ICSU）、国際社会科学団体連盟（IFSSO）等43団体である。

学術関係国際会議の開催、後援

わが国の多数の科学者が世界各国を代表する関係科学者と接し、最近の研究情報を交換し、わが国の科学の向上発達を図り、行政、産業および国民生活に科学を反映浸透させることを目的として、昭和28年以降毎年おおむね4件の学術関係国際会議を学・協会と共同主催している。昭和62年度は、1）第6回ケムローン世界会議、2）第18回低温物理学国際会議、3）法哲学・社会哲学国際学会連合第13回世界会議、4）第6回国際会計教育会議の4つを共同主催し、昭和63年度は、1）国際家族法学会第6回世界会議、2）第9回世界地震工学会議、3）第8回国際内分泌学会議、4）第5回国際植物病理学会議の4つを共同主催することとしている。

以上の国際会議のほか、毎年15件前後の国際会議（国内開催）を後援している。

代表派遣

世界各地で開催される学術関係国際会議にわが国の学術の状況を反映させ、さらに国際学術協力に寄与するため、

本会議から代表を派遣している。

国際協力事業

本会議は、国際学術連合会議（ICSU）と世界気象機関（WMO）が行う「気候変動国際研究計画」（WCRP）等の国際共同・協力事業に協力するため、国内の実施計画の立案・調整を行うとともに関係研究者間の研究連絡、交流の促進を図っている。

学術文献収集

本会議は、国際学術団体及び各国の学術研究機関等から、継続的に約1900種の刊行物を受入れ、資料の有効利用を図っている。

生命科学と生命工学特別委員会中間報告

—生命科学の研究と教育の推進方策について—

現在、生命科学に対する関心は社会全体に広がっており、生命科学の推進のためのいろいろな活動が国、民間、学界などそれぞれの立場で行われつつある。このような時に、生命科学と生命工学特別委員会としては、広い視野に立って学問分野を横断的にとらえて、生命科学の推進方策について以下要約のごとき具体的提言を行い、各方面の意見を聴取することは非常に重要であり、時機を得たものであると考える。

【要約】

広い視野から生命科学の研究と教育の推進の方策を討議し、提案し、時に応じて企画、実行する組織として、生命科学教育推進会議（仮称）を設置すること。そして、この会議の事業の一つとして、まず生命科学研修コース開催のための機構をつくり、各種の研修コースを実施することが緊急に必要である。

登録学術研究団体等との連絡協議会

本会議は、本会議活動の周知を図り、学術研究団体との連絡・協力関係を維持・強化するための活動の一環である登録学術研究団体等との連絡協議会の第2回目を、12月7日に、東日本の団体を対象にして本会議講堂で、12月11日に、西日本の団体を対象にして大阪ガーデンパレスで、それぞれ開催した。

今回の連絡協議会では、最初に、近藤次郎会長から、本会議の職務・権限や組織・構成などの説明の後、最近の活動として、去る10月の第103回総会で採択された勧告等の内容紹介などが行われた。

続いて、事務局から、現在進められている第14期会員推薦手続について、特に近々各登録学術研究団体に依頼される予定の「会員の候補者」の選定と「推薦人（予備者を含む）」の指名に関する届出の手続を中心に詳しい説明が行われた。この説明については、多くの出席者からその手続の詳細をただす質問が出された。

なお、出席者数は、12月7日は、339団体339名、12月11日は、58団体58名であった。

多数の学術研究団体の御協力により、「日本学術会議だより」に掲載していただくことができ、ありがとうございます。

なお、御意見・お問い合わせ等がありましたら下記までお寄せください。

〒106 港区六本木7—22—34

日本学術会議広報委員会

（日本学術会議事務局庶務課）

電話 03 (403) 6291

1987年度第4回(新旧合同)評議員会議事録

日 時: 1987年12月12日15時から18時30分

場 所: 東京大学山上会館

出席者: *増田彰正会長, ○一國雅己副会長, 相川嘉正, *石渡良志, *大隅多加志, *小嶋稔, *梶原良道, *兼岡一郎, *日下部実, 佐藤和郎, 清水洋, *鈴木款, *柳哮, *田中剛, *坪田博行, *高野穆一郎, *野津憲治, *松葉谷治, 松久幸敬, ※綿拔邦彦各評議員

(○新会長, ※新副会長, *新評議員)

I. 前回の議事録を承認した。

II. 引き継ぎ事項

1. 庶務(大隅評議員)

*賞の選考や春季シンポジウムの日程とリンクした会の運営方法を確立することが必要となろう。

2. 会計(清水評議員)

*1987年度までが旧評議員の分担である。

3. 編集

(一國副会長)

*G. J. はVol.21が1988年3月までに発行できる見通しである。Vol.22から編集の新体制に移行するが、いままでManaging Editorとして英文の校閲をお願いしていた小穴名誉会員が、勇退されるのでこれを補うことが課題となろう。

(石渡評議員)

*「地球化学」21巻2号を年内に発行できる予定である。年に3回発行することになれば、会則の変更が必要になる。

(松久評議員)

*1月(春季シンポジウム), 5月(年会予告), 9月(年会プログラム)に、ニュースを発行している。

*1988年1月の分は、旧評議員でお世話する。

4. 行事(綿拔評議員)

*春季シンポジウムでは、試みとしてポスターセッションも一般公募する予定である。ただし今回は事前にその分のプログラムをニュースで知らせることはできない。

III. 議事

1. 学会賞受賞者選考委員会の発足について

*1988年度は、学会賞と奨励賞とを選考することとし、1987年度と同様の手続きと日程によって選考を進めるものとし、木越評議員に選考委員長をお願いするとの提案が一國副会長よりあり、これを了承した。

2. 第14期日本学術会議会員候補者および推薦人の選出について

*総会の席上、本合同評議員会での新旧両評議員による選出が了承されているとの説明が、会長よりあった。また、大隅評議員から第13期における本会評議員会での選出過程について紹介され、意見を交換した。

*まず、会員候補者について過半数に達するまで投票を繰り返すことを確認の上、無記名投票に移り、19票中、増田12票(次点本田5票)で、増田彰正氏を会員候補者に選出した。

*ついで推薦人・推薦人予備者の選出にあたっては、2名連記無記名投票により得票順に推薦人・同予備者とし同票者は、年長者を高順位とすることを確認した。投票の結果一國12票・松尾7票・本田5票・木越4票・北野4票・その他6名各1票で、推薦人に一國雅己・松尾禎士両氏、推薦人予備者に本田雅健氏を第1位に、木越邦彦氏を第2位にそれぞれ選出した。

3. シンポジウム『隕石と太陽系の起源』共催について

*1988年4月の第1回については共催を了承し、ニュースに載せることとした。

*1989年の第2回については、お世話くださる会員があれば、本会の行事と何らかの形でリンクさせて開催する可能性もあることを確認した。

4. 旧評議員退席のき引き続き新評議員会

*一國会長より、編集:松久(G.J.), 和文誌:石渡, ニュース:鈴木, 庶務:高野, 会計:野津, 行事:小倉の担当を幹事会メンバーとして委嘱、これを了承した。また、これに伴い編集委員会委員長としての松久氏を会則により会長委嘱の評議員とする件を了承した。

○IGBPに関する最近の動向

地球環境の将来予測能力の開発を目的としたIGBP(International Geosphere-Biosphere Programme, 地球圏・生物圏国際共同研究計画)の最近の動向についてお知らせする。

1987年の1月にICSUのExecutive BoardでIGBPに関するSpecial Committee(S.C.)の設立が承認され、第1回のS.C.meetingが1987年パリで、第2回が1988年2月にボストンで開かれた。S.C.はJ.J.McCarthy(USA)を委員長として19人のメンバーから成り、日本からは根本敬久東京大学海洋研究所長が加わっている。

S.C.には下記の4つのkey area

1. Terrestrial Biosphere-Atmospheric Chemistry Interactions. Chairman:P.J.Crutzen(West Germany)
 2. Marine Biosphere-Atmospheric Interactions. Chairman: T.Nemoto(Japan)
 3. Biospheric Aspects of the hydrological Cycle. Chairman: S.Dyck(East Germany)
 4. Effects of Climate Change on Terrestrial Ecosystems. Chairman: B.H.Walker(Australia)
- と4つのWorking Groups

1. Global Geosphere-Biosphere Modeling Chairman:

B.Bolin(sweden)

2. Date and Information Systems. Chairman: S.I. Rasool(France)
3. Techniques for extracting Environmental Data of the Past. Chairman: H.Oeschger(Switzerland)
4. Geo-Biosphere Observatories. Chairman: R.Herrera(Venezuela)

が作られ研究計画案の作成を進めている。各グループからのレポートが1988年10月のストックホルムでのICSUのScientific Advisory Councilに提出される予定である。

IGBPに対する国内の検討組織とし、日本学術会議の近藤次郎会長のもとにIGBPに関する打ち合わせ会議が設けられ、大島康行(早稲田大学)氏が幹事となっている。この会議には大学に加えて関連省庁からのメンバーが加わり、日本地球化学会からは酒井均、角皆静男、松本英二が参加している。この会議の当面の課題は、日本の研究計画案の作成とIGBPに関する政府への勧告のための作業を行うことである。

1986年12月に日本地球化学会にIGBP委員会(会長が委員長、松本英二幹事、井上久幸、野崎義行、和田英太郎各委員)を発足させ、1987年の10月の東邦大学での年会の折りに夜間小集会を開催した。当委員会としては学術会議での活動が続けるとともに、集会や情報提供を行いたいと考えている。

IGBPのS.C.のExecutive DirectorであるT.Rosswall(Sweden)が1988年3月に来日し、その際話し合う機会があった。Rosswall氏のkey scientistsの発掘とその人達の協力関係がIGBPの成功にとって必須との考えは非常に印象的であった。

(松本英二)

○IGAC計画の最近の動向

東京大学理学部 小川 利紘

1. はじめに

IGCAとはInternational Global Atmospheric Chemistry Programのアクロニムで地球大気化学国際共同研究計画(略称:イーギャック計画)と称す。IAMAP(国際気象学・大気物理学協会)に属するコミッションの一つCACGP(大気化学と地球汚染に関する委員会)が現在検討中の国際共同研究計画である。

二酸化炭素以外にも多くの大気微量成分の濃度がグローバルに増加していることが現在明らかにされており、これらは温室効果を介して気候システムの物理的パラメタを変える。また、オゾン層の変調や降水の酸性化などのグローバルな問題も顕在化している。このような大気質の変調現象の実態を把握し、その原因を究明していくうえで大気化学的手法は有効であるにちがいない。IGACでは微量気体とエアロソルのグロー

バルな分布と長期変動傾向を調査するだけでなく、大気への供給源、大気中の変換反応と輸送、大気からの消失過程など化学物理プロセスの解明にも重点を置いている。

多くの大気微量成分は生物圏起源であり、また大気から生物圏に取り込まれる。そこでIGACは大気微量成分の生物圏との交換過程も重視している。二酸化炭素、メタンおよび非メタン系炭化水素、一酸化二窒素、酸化窒素類、塩化メチル、硫化ジメチルなどについて生物圏から大気へ供給されるフラックスを正確に見積ることは、大気質の変調における人的要因の影響を評価する上で決定的に重要であるからである。IGBP:A Study of Global Change(地球圏-生物圏国際共同研究計画)においても、気圏と陸上・海洋の生物圏との相互作用の研究は中心的なテーマとして取りあげられている。したがって、IGACはIGBPと密接な関連を持つことになる。

わが国においては、日本学術会議気象学研究連絡委員会の下にIGAC作業委員会(主査:小野晃, 幹事:小川利紘)が設置され、わが国としてIGAC計画にどう取り組むか、検討が始まっている。

2. スtockホルム会議

1986年9月StockホルムでIGACのための会合が初めて持たれた。この会議で採択された文書はIGAC計画を準備するうえで基調となるものである。以下にその邦訳をのせる。

国際気象学・大気物理学協会(IAMAP)に属する「大気化学と地球汚染に関する委員会」(CACGP)は、大気環境に対する人間活動の影響を予測し、その有害効果を減らそうとするならば、広汎な時間空間スケールにわたる大気化学のプロセスをよく理解しておくことが不可欠であると確信する。CACGPは、大気環境の問題が全世界の国々に影響を及ぼす全地球的なものであることに特に注目するものである。オゾン層の変化、降水の酸性化、赤外放射活性微量気体の濃度増による気候変動の可能性、地球規模の対流圏内において窒素と硫黄のサイクルに占める主要栄養成分が交替していることなどの今日的諸問題は、地球規模の変動として人類の大気環境に対するわれわれの関心を高めている。したがって、地球大気化学における国際共同研究遂行のため一層努力する必要性が痛切に感じられるのである。

地域的なスケールから地球規模のスケールまで、大気化学の研究計画が多くの国々において現在進行中か計画中であり、その数も急速に増加していることをCACGPは承知している。CACGPは地球大気化学に関する特別な国際共同研究、すなわち地球大気化学国際共同研究計画の策定に取り掛かることをきめた。この計画はまた、国際学術連合会議(ICSU)が最近取り

組み始めた地球圏—国際協同研究計画／地球圏変動研究の基幹部分としての役割を持つ。CACGP委員会はIGAC計画の一環として推進される国際協同研究プロジェクトを組織するに当たって指導的役割を果たすことになる。IGAC計画の目標は、生物地球化学サイクルの大気構成部分、特に対流圏の物理化学過程と対流圏・地表間の物質交換に焦点を当て、これらに対する理解を達成することである。

CACGP委員会は今後数年間、次にあげた手順でこの計画を展開する。

(1) 現在進行中か計画中の1国あるいは多国間の研究計画相互間で、国際的な情報交換と協力関係を促進し、協同研究を一層活発に発展させる。例えば、(a) 既在または計画中の大気化学地域観測網および地域的キャンペーン相互間で測器の合同相互検定などの交流をはかる。(b) 生物地球化学サイクル、特に炭素サイクル、窒素サイクル、硫黄サイクルを研究中のプロジェクト参加者間の交流をはかる。(c) 南半球や熱帯など特定地域における大気化学研究計画を強化する。(d) それぞれ異地域に属する大気化学研究グループ間の協同研究を促進する。(e) 大気化学研究計画をこれから促進していこうとする諸国における若手大気化学者に対する教育訓練計画を立てる。

(2) IGAC計画に対するCACGP委員会の構想を、IAMAP、IUGGおよびICSU地球圏変動研究特別委員会に申し入れ、地球圏変動研究計画との調整をはかる。

(3) 1987年8月カナダのピーターボロで開かれる第6回CACGP大気化学シンポジウムにおいて、IGAC計画に関する小作業会を持つ。この作業会合は国際純正および応用化学連合(IUPAC)大気化学委員会と共催で開き、(i)グローバル分布とトレンド、(ii)生物圏および地表との交換過程、(iii)気相光化学、(iv)多相反応過程、(v)理論的研究およびモデル構築などにおける現状と課題を概観しつつ、化学と気象学の双方の観点から発表と討論を行う。特に上記5項目のうちのどれが国際的な組織的研究を必要としているかをレビューすることを目的とする。大気化学のコミュニティに討論の場を提供し、IGAC計画として取り上げられるべき諸課題について大いに議論をしてもらう。

(4) 1988年オーストラリアのメルボルンで1～2週間の作業会合を開き、IGAC計画の正当性、目的、計画実施要綱を詳細にわたり明らかにする。具体的な研究課題は、地球大気化学システムを理解するうえで基本的に重要な諸領域、および国際協力を必要とする室内・野外実験に焦点を合わせる。

(5) IGAC計画における国際協力研究計画の具体的な構想がメルボルンの作業会合で合意を見れば、その組織化と指導はCACGP委員会の主導と責任で行う。

CACGP委員会はIGAC計画の国際的性格をここであらためて強調し、すべての国、すべての参加者による科学的卓抜性の育成を奨励し、本計画への活発な参加を呼びかけるものである。

3. ピーターボロ会議

前掲文書に述べられている予定通り、1987年8月カナダのピーターボロで作業会合を開いた。この会合では前記5項目の研究テーマ、すなわち

(1) 大気微量成分のグローバル分布とトレンド (Dan Albritton) (2) 生物学的および地表・海表面交換過程 (Ian Galbally) (3) 気相光化学の室内および野外実験 (Tony Cox) (4) 雲とエアロソルの化学および湿性沈着 (Sherry Rowland) (5) モデリング (Paul Crutzen)

の分科毎に基調文書を作成することになった(カッコ内に報告書作成者)。またCACGP委員会は8人の委員からなるIGAC委員会を新設し(主査: Graeme Pearman, 幹事: Dan Albritton), IGAC計画に取り組む体制を固めている。

IGAC計画の具体的な構想案については1988年10月にメルボルンで作業会合を開いて議論する。以下の項目毎に、実行計画の具体案を作ることになり、それぞれ分担者(カッコ内に示す)が決まった。

(1) 情報交換 (Whelpdale, Cicerone) (2) 教育・訓練 (Charlson, Winchester) (3) 測器相互検定・比較 (Albritton, Ehhalt) (4) 研究プロジェクト

(4a) 基礎物理化学データ (Niki, Akimoto) (4b) データベース・精度コントロール (Fraser, Stangland) (4c) グローバル測定プログラム (Prinn, Prather) (4d) 地域プログラム

(4d1) アジア・東南アジア・オセアニア (Yan, Ogawa, Galbally) (4d2) 熱帯南米・アフリカ (Sanhueza, Crutzen, Baut-Menard) (4d3) 高緯度(南北極域) (Barrie, Isaksen, Delmas) (4d4) 海洋環境 (Andreae, Duce) (4d5) 北米・ヨーロッパ (Fehsenfeld, Hov)

わが国の研究者は各項目に自由に参加することができるが、特に(4d1)に関しては、わが国の研究者の積極的な参加が期待されている。わが国としては、研究者層を広げて広汎で組織的な研究を展開し、この国際協同研究計画に大いに貢献したいものである。

編集者 鈴木 款 〒305茨城県つくば市長峰1-1 気象研究所地球化学研究部 電話 0298 (51) 7111

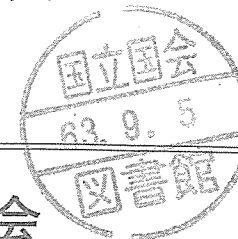
発行所 日本地球化学会 〒113 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル(4F)

日本学会事務センター内 電話 東京 03 (817) 5801

日本地球化学会ニュース

No. 114

1988. VIII. 15



1988年度日本地球化学会年会

主催 日本地球化学会 共催 日本化学会

日時 10月12日(水)～14日(金)

会場 広島大学総合科学部 (広島市中区東千田町1-1-89)

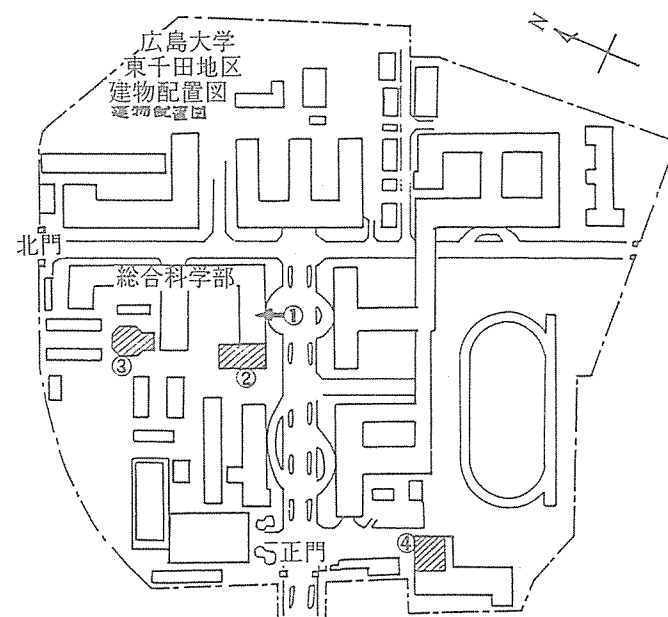
年会本部 電話 082 (240) 4912<直通>

会場		9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
12日 (水)	A	受 付	一般講演 (海洋) 1A01-1A10				一般講演 (海洋) 1A11-1A29						
	B		一般講演 (有機物) 1B01-1B10				一般講演 (有機物・堆積物) 1B11-1B26						
	C		一般講演 (火山・隕石) 1C01-1C10				一般講演 (隕石・岩石) 1C11-1C27						
	D		課題講演 3 (自然災害) 1D01-1D08				課題講演 3 (自然災害) 1D09-1D18						
13日 (木)	A		課題講演 1 (沿岸海域) 2A01-2A10				一般講演 (海洋熱水) 2A11-2A17		記 念 講 演	総 会		懇 親 会	
	B		課題講演 3 (環境放射能) 2B01-2B10				一般講演 (堆積物) 2B11-2B17						
	C		一般講演 (岩石・地殻) 2C01-2C13				一般講演 (岩石・地殻) 2C14-2C20						
	D		一般講演 (大気・降水) 2D01-2D13				一般講演 (大気・降水) 2D14-2D20						
14日 (金)	A		一般講演 (温泉・熱水) 3A01-3A08				一般講演 (鉱床) 3A09-3A16						
	B		一般講演 (堆積物・サンゴ礁) 3B01-3B08				一般講演 (堆積物) 3B09-3B15						
	C		一般講演 (地殻・マントル) 3C01-3C08				一般講演 (地殻・炭酸塩等) 3C09-3C16						
	D		一般講演 (降水・陸水) 3D01-3D08				一般講演 (陸水) 3D09-3D18						
	P		ポスター討論時間										

大学への交通

J R 広島駅表口

- ・路面電車
(広島電鉄, 通称広電)
①字品行 (⑤は不可)
広島大学前下車, 約25分
- ・広前バス (通称赤バス)
②字品方面行
広大前下車, 約25分
経路は広電と同じ
- ・タクシー (約10分)
北門又は正門まで
正門から構内に
入れます
- ・一般車は構内
駐車できません



年会会場案内図

- ①年会受付
(総合科学部玄関)
- ②年会会場
(大講義室)
- ③特別会場
(大講義室)
- ④懇親会場
(大学会館大集会室)

講演時間は、一般講演：討論時間も含めて15分，課題講演：討論時間も含めて20分です。
座長は一部未確認のため変更する場合があります。

第1日 (10月12日)

A会場

- 一般講演 (09:30~10:45) 座長 中山英一郎
- 1A01 平均滞留時間 (海水中) を基準としての元素データ整理 (京都教育大) ○山本俊夫・Suthon Chuaygud
- 1A02 湾堆積物の逐次抽出を取り入れたPIXE法による元素分析予備実験 (大阪府放中研) ○松田八東・伊藤憲男・石山稔雄
- 1A03 海底質中の水銀の化学形 (鹿児島大理) ○坂元隼雄・富安卓滋・米原範伸・鎌田政明
- 1A04 駿河湾における有機リガンド濃度の季節変動 (東海大海洋) ○松村 徹・廣田 致
- 1A05 噴火湾における¹⁴Cによる大気-海洋間の二酸化炭素の交換 (北大水産) 渡辺修一・本多牧生・○中島理夫・角皆静男
(10:55~12:10) 座長 渡辺修一
- 1A06 黄海・東シナ海のRaの同位体 (広大総科・東大海洋研) Vimonrut Kasemsupaya・○野崎義行・坪田博行
- 1A07 天然水中のモリブデンに関する研究一特に過酸化水素の影響について一 (近畿大理工) ○中口 譲・青野辰雄・渡辺定弘・白崎俊浩・福岡勇人・平木敬三
- 1A08 Cr (Ⅲ) カラム抽出を利用した海水中のCr (Ⅲ) /Cr (Ⅵ) の分離濃縮 (高知女子大・京大化研・京大理) ○一色健司・宗林由樹・中山英一郎
- 1A09 グラファイト炉-原子吸光分析法による海水中のイッテルビウムの定量 (近畿大理工総研・近畿大理工) ○藤野 治・古賀康夫・西村康司・平井志納・中口 譲・青野辰夫・平木敬三
- 1A10 海水中の酸素酸元素の除去過程とMn酸化物について (京大化研・京大理) ○宗林由樹・中山英一郎・木原壮林・松井正和
(13:10~14:25) 座長 野崎義行
- 1A11 海水中の溶存有機物と銅 (Ⅱ) イオンとの相互作用 (気象研) ○緑川 貴・田上英一郎・杉村行勇
- 1A12 海水中の溶存重金属の存在状態 (名大水圏研) ○安達真理子・金森 悟・金森暢子
- 1A13 海水および堆積物中のビスマスの分布 (気象庁・気象大学校) ○大山準一・丸山 文・土器屋由紀子
- 1A14 海水中のDOC/DON: WHOIでの分析法の相互

検定の結果 (気象研) ○鈴木 款・田上英一郎・杉村行勇

- 1A15 海水中のDOC/DON濃度の海洋学的意義 (気象研) ○鈴木 款・田上英一郎・杉村行勇
(14:25~15:40) 座長 鈴木 款
- 1A16 西部北太平洋の硝酸イオンの窒素同位体組成 (富山大理) ○平野光浩・吉田尚弘
- 1A17 暖水塊におけるクロムとヨウ素の分布について (京大理・京大化研・高知女子大) ○中山英一郎・宗林由樹・一色健司
- 1A18 日本海の水塊構造—トリチウムとフロンの分布から— (北大水産) ○渡辺修一・渡辺豊・斎藤子明・角皆静男
- 1A19 高緯度海域における²³⁰Thと²³¹Paの除去の特徴 (北大水産) ○田口和典・原田 晃・角皆静男
- 1A20 大陸斜面堆積物中における遷移元素の再移動 (東海大海洋) ○加藤義久・岡部史郎
(15:55~17:10) 座長 田上英一郎
- 1A21 マンガン・クラストの化学組成—成因との関連性について (都立大理・群馬大工・東大海洋研・地調) ○海老原充・三浦 勉・赤岩英夫・堀江絹子・児玉幸雄・酒井 均・臼井 朗
- 1A22 太平洋深海底土中のバリウム (北大水産) 角皆静男・○阿部祐士
- 1A23 伊豆・小笠原海溝9750mから採集した粒状堆積物の化学的特徴 (東大海洋研・日大文理) ○野崎義行・大田洋一・本田雅健
- 1A24 日本海溝 (8800m深) における放射性核種の鉛直フラックスの変動—セジメント・トラップ実験から— (東大海洋研・日大文理) ○野崎義行・大田洋一・竹内 健・生田直子
- 1A25 海溝域における有機物の鉛直輸送過程 (名大水圏研) 半田暢彦
(17:10~18:10) 座長 才野敏郎
- 1A26 伊豆・小笠原弧とマリアナトラフ (18° N) における海底熱水活動を示唆するバクテリアの分布 (地調・東大海洋研) ○三田直樹・前田昌調・川幡穂高・臼井 朗・湯浅真人
- 1A27 伊豆・小笠原海域における海底熱水活動 (広大総科・東大海洋研・地調) ○下島公紀・石橋純一郎・中尾征三・蒲生俊敬・酒井 均・坪田博行
- 1A28 北フィジー海盆の海底拡大軸上の水温異常とマンガン、メタンの濃度異常 (国公研・東大海洋研) ○野尻幸宏・石橋純一郎・大槻 晃・酒井 均
- 1A29 北フィジー海盆の海底拡大軸上の栄養塩濃度分布 (国公研・東大海洋研) 大槻 晃・○野尻

幸宏・石橋純一郎・大田 秀

B会場

一般講演 (09:30~10:45) 座長 和田英太郎

- 1B01 堆積物中の有機炭素の迅速測定法(石油開発技術センター)町田 勉・○山田 真
1B02 濃縮法に活性炭を用いた天然水中の有機化合物に関する研究(近畿大理工・同環境研)○平山 宏・松政義高・水江明弘・中口 譲・平木敬三
1B03 過ヨウ素酸塩を用いたフミン酸の酸化分解法(東大理・日大農獣医)○志方比呂基・村江達士・清水 洋・高橋武美・増田彰正
1B04 ゲル電気泳動法によるフミン酸の分子量分析(東大理・日大農獣医)○志方比呂基・村江達士・清水 洋・高橋武美・増田彰正
1B05 グリシンの分子内同位体比—I, 測定法の検討(三菱化成生命研・都立大理)○鶴崎 実・和田英太郎・石渡良志

(10:55~12:10) 座長 清水 洋

- 1B06 アミノ酸態炭素および窒素の安定同位体組成について(三菱化成生命研)南川雅男
1B07 水田におけるメタンの生成:CO₂/CH₄比と炭素同位組成(三菱化成生命研・栗田工業中研・東京農大)○和田英太郎・中村孝一・高井康雄
1B08 移動に伴う天然ガスの組成変化について(地調)○猪狩俊一郎・坂田 将
1B09 現世堆積物中におけるnon-solvent extractable脂質の起源, 及び地球化学的特性—各種土壌試料を対象に—II—(愛知学院大教養)西村弥重
1B10 基礎誌「浜勇知」の中新世泥質岩に含まれる生物指標化合物(地調・北大理)○坂田 将・秋山雅彦

(13:10~14:10) 座長 石塚明男

- 1B11 新庄盆地新第三紀の堆積岩から検出されたカルボン酸とラクトンとの関連(筑波大化学系)○古宮正利・下山 晃・原田 馨
1B12 諏訪湖Microcystis Spp.中クロロフィルaの炭素及び窒素の安定同位体組成の経時変化(神奈川県立衛生短大・三菱化成生命研)○片瀬隆雄・和田英太郎
1B13 南極マクマードドライバレー土壌中の長鎖炭化水素の起源(島根大教育・東大教養・極地研究振興会)○松本源喜・秋山 優・綿拔邦彦・鳥居鉄也
1B14 堆積高分子有機物の生成過程IV 合成ケロジェン(メラノイジン)の解析(都立大理・桐蔭高専・創価大教養)石渡良志・市村隆治・○

森永茂生・山本修一・山下 智

(14:10~15:10) 座長 川端穂高

- 1B15 現世ケロジェンの熱変化生成物の解析:極性化合物(都立大理)○石渡良志・菅原 智
1B16 プリスタン/ファイタン, n-C₁₇/プリスタン及びn-C₁₈/ファイタンの地球化学的考察(地調)米谷 宏
1B17 アラビア海とベンガル湾の堆積物の有機物について(東大海洋研・ハンブルグ大)○石塚明男・Venu Ittekkot・Volker Hoffman
1B18 沿岸堆積物中の脂質:GC-MSによる解析(長崎大教育・創価大教育・都立大理)○近藤寛・山本修一・石渡良志

(15:25~16:25) 座長 門谷 茂

- 1B19 日本海溝セジメントトラップ試料のPy-GC-MSによる解析(創価大教育・都立大理・名大水圏研・東大海洋研)○山本修一・石渡良志・半田暢彦・野崎義行
1B20 横浜港の底質環境(横浜市公害研)白柳康夫
1B21 燧灘における懸濁物の挙動(中工試)星加章
1B22 瀬戸内海堆積物中のフルボ酸態, フミン酸態ヒ素について(中工試)平田静子

(16:25~17:25) 座長 増沢敏行

- 1B23 海洋堆積物間隙水中の有機態金属(東海大海洋)○合田耕一・廣田 致
1B24 昭和基地周辺の海底堆積物について(弘前大理・極地研究振興会・極地研)○中谷 周・鳥居鉄也・森脇喜一・吉田栄夫
1B25 十三湖及び周辺湖沼堆積物の堆積環境変遷(弘前大理・東北大理)○中谷 周・箕浦幸治・佐藤 裕
1B26 堆積物中の硫黄, 炭素, 窒素等による堆積古環境の推定(地調)○狛 武・鈴木尉元

C会場

一般講演 (9:30~10:45) 座長 三浦保範

- 1C01 火山列島硫黄島におけるガンマ線スペクトル探査(防災科技センター)吉田則夫
1C02 多良岳火山の火山岩類の主成分組成およびSr同位体比(九大理)○小形昌徳・柳 哮
1C03 トルコにおける第四紀火山地帯ガス試料中の希ガス同位体組成(岡山大地球研・神戸大理・M.T.A.トルコ)○長尾敬介・松田准一・T.Ercan
1C04 南イタリアのテクトニスとヘリウム同位体比(東大理・C.N.R.・パレルモ大)○佐野有司・脇田 宏・F.Italiano・P.M.Nuccio

- 1C05 加速器質量分析法を用いた炭素-14の測定(共立薬大・東大核研・同原総セ・日大文理・東大理・都立大理)○吉川英樹・今村峯雄・小林紘一・永井尚夫・吉田邦夫・中原弘道

(10:55~12:10) 座長 比屋根 肇

- 1C06 Partition of As and P between volcanic gases and rocks(東工大理)○V.S.Mambo・松尾禎士・吉田 稔
1C07 隕石の地球落下年代と宇宙線照射年代(I)(山口大理・岡山大地球研)○三浦保範・長尾敬介・古賀寿芳・神 大平
1C08 K-T境界中の希ガス(山形大理・山口大理)○高岡宣雄・三浦保範
1C09 衝撃による希ガスの取り込みについて(神戸大理)○矢島春秋・松田准一
1C10 イタリア・グビオ近郊の白亜紀-第三紀境界層試料中の微量元素存在度(都立大理・群馬大工・東大理)海老原充・○三浦 勉・赤岩英夫・甘利幸子・小嶋 稔

(13:10~14:10) 座長 中村 昇

- 1C11 インターナルアイソクロンを用いたEコンドライトの起源の探究する試み, その1(東大理・科学博物館)○鳥越紀子・島 正子
1C12 いくつかのDiogenite隕石に関する年代学的研究(理研・東大理)○高橋和也・清水 洋・増田彰正
1C13 気相成長ダイヤモンド中の希ガスの分別(神戸大理・岡山大地球研)○福永一哉・松田准一・長尾敬介・伊東敬祐
1C14 隕石および人工ダイヤモンドのESR研究(神戸大理・阪大)○松田准一・池谷元伺

(14:10~15:10) 座長 海老原 充

- 1C15 石鉄隕岡バラサイト中のカンラン石のV字形希土パターンの形成について(東大理)○斎藤努・清水 洋・増田彰正
1C16 タイプ3コンドライト(Tieschitz/Semarkona/Allende)のコンドリュール, -リム, -コア中の希土類元素およびアルカリ元素の分布から見た前駆物質(神戸大理)○野田真治・中村昇
1C17 隕石物質を用いたアルカリ元素に関する蒸発実験(II)(神戸大理)○島岡太郎・中村 昇
1C18 隕石物質を用いたアルカリ元素に関する蒸発実験(III)残渣の化学組成(神戸大理)○中村昇・島岡太郎

(15:25~16:40) 座長 松田准一

- 1C19 赤外3μmスペクトルから見た星形成領域の炭素質の塵(電通大・ハワイ大)○坂田 朗・

和田節子・A.T.Tokunaga

- 1C20 SiO系の星周塵の構造解明—CO, CHラジカル共存下での固体生成(電気通信大学)○和田節子・坂田 朗・岩沢 力
1C21 炭素鎖分子による暗黒星雲TMC-1の分布観測(東大理・名大理・東大天文台野辺山宇宙観・富山大理)○平原靖大・鈴木博子・山本 智・高野秀路・石川晋一・大石雅寿・増田彰正・海部宣男
1C22 Allende隕石の非抽出性炭素質物質の構造(東大理・日大農獣医)○北島富美男・村江達士・清水 洋・高橋武美・増田彰正
1C23 熱分析-質量分析法による炭素質隕石中の有機物の研究(筑波大化学系)○下山 晃・小宮正利・原田 馨

(16:45~17:45) 座長 福岡孝昭

- 1C24 岩石試料の放射化分析に関する2, 3の考察(海技大学校・神戸大教養・京大原子炉)○藤谷達也・寺門靖高・高田実弥
1C25 地調標準岩石中のホウ素同位体比測定(上智大理工・東工大原子炉)○武蔵正明・小坂知子・大井隆夫・垣花秀武・野村雅夫・岡本真実
1C26 GSJ岩石標準試料JLs-1およびJDo-1の化学組成(群馬大工)○相沢省一・赤岩英夫
1C27 種々の鉱物の存在下での海水の蒸発濃縮過程におけるストロンチウムの行動(東邦大理)○三好登和子・今橋正征

D会場

課題講演(自然災害の予測と防災)

コンビンナー 吉岡龍馬・川辺岩夫

(09:30~10:50) 座長 吉岡龍馬

- 1D01 御岳Pml降下軽石の風化と斜面崩壊(防災科技センター・三菱金属中研)○田中耕平・上田昇・小林武彦
1D02 岩石の風化ならびに変質と斜面崩壊(島根大教育)三浦 清
1D03 水質から判断される沖積低地の被圧地下水の挙動(三重大教育)森 和紀
1D04 地盤沈下に伴う移動井の水質変遷例と若干の考察(地調)池田喜代治・○黒田和男
(11:00~12:20) 座長 高野穆一郎
1D05 松の山越地すべり地地下水の挙動(新潟大積雪地域災害研・同農)○佐藤 修・吉田昭治・稲原一成
1D06 神戸層群の地すべり地での地下水と凝灰質泥岩の間の化学反応について(大阪市大理)木村耕治

- 1D07 天然水の化学組成からみた風化速度（京大防災研）吉岡龍馬
- 1D08 地下水の水質変化と地殻変動—六甲山系を例として（京大防災研・神戸大工）○吉岡龍馬・沖村 孝・小泉尚嗣
(13:20~14:20) 座長 五十嵐文二
- 1D09 微小地殻応力変化に対する地下流体の応答—地球潮汐による地下水湧出量変化—(愛媛大理)○川辺岩夫・灘野伸治・大野一郎
- 1D10 自噴性深井戸における溶存ガスの組成変動(名大理)○榎原淳一・杉崎隆一
- 1D11 山崎断層テストフィールドにおける地震予知の水文化的研究(京大防災研)○小泉尚嗣・吉岡龍馬・岸本兆方
(14:25~15:25) 座長 佐藤 修
- 1D12 日向灘地震(M=6.6, 1987年3月18日)の地球化学前兆異常と地下水異常(愛媛大学理)○川辺岩夫・大野一郎・灘野伸治・杉尾秀樹・渋谷 隆
- 1D13 地下水中のラドン濃度の変動成分について(東大理・放医研)○五十嵐文二・脇田 宏・中村裕二・佐野有司・野津憲治
- 1D14 伊豆大島における地球化学的火山観測(東大理)○野津憲治・佐野有司・五十嵐文二・脇田宏
(15:40~17:00) 座長 川辺岩夫
- 1D15 火口湖におけるポリチオン酸の挙動—白根湯釜のモデリング(東大教養)○藤原佳子・高野穆一郎・綿拔邦彦
- 1D16 イオン電極による火口湖水中のポリチオン酸モニタリング(Ⅱ)(東大教養)○大沢信二・高野穆一郎・綿拔邦彦
- 1D17 活動的火口湖における硫黄化合物の地球化学的サイクル(東大教養)高野穆一郎
- 1D18 鹿児島湾北部海底噴気活動のその後(鹿児島大理)○鎌田政明・坂元隼雄

第2日(10月13日)

A会場

課題講演(沿岸海域の地球化学)

コンビーナー 塩沢孝之・坪田博行

(09:00~10:40) 座長 塩沢孝之

- 2A01 東京湾における溶存有機物の分子量分布とそのアミノ酸組成(農工大農)○小川浩史・小倉紀雄
- 2A02 宇和島湾ハマチ養漁場の有機物動態(香川大農)門谷 茂
- 2A03 海洋生物における微量元素組成の規則性(名

大水圏研)増澤敏行

2A04 生命起源に関する新しい知見について(奈良教育大・島根大理・紀本電子)○藤永太一郎・橋谷 博・紀本岳志

2A05 有明海沿岸域の間隙水と海水中のリン酸イオンおよび窒素化合物の濃度:潮位差による影響(佐賀短大・佐賀大理工)○秀 そのみ・飯盛和代・飯盛喜代春

(10:50~12:30) 座長 小倉紀雄

2A06 堆積物コアの加速器¹⁴C年代・有機物安定炭素同位体組成からみた浜名湖完新世の堆積史(名大理・名大アイソトープセ)○中井信之・馬場直美・中村俊夫・栗山豊子

2A07 沿岸域堆積物間隙水のウラン濃度の変動(北大水産)○長尾誠也・角皆静男

2A08 沿岸海域における重金属の沈降・堆積初期過程(広大総科・広大生物生産)○倉本健一・下島公紀・坪田博行・遠藤拓郎

2A09 日本近海で得られたシロウリガイおよびチューブワームの¹⁵N, ¹³C同位体比(東大海洋研)○オ野敏郎・大田 秀

2A10 相模湾初島沖シロウリガイコロニー周辺の地球化学的調査 結果:淡青丸KT88-1航海報告(東大海洋研・同地震研・広大総科・京大理・同化研・名大水圏研)○蒲生俊敬・石橋純一郎・金銀沫・渡辺正晴・藤岡換太郎・木下正高・下島公紀・中山英一郎・宗林由樹・増沢敏行

一般講演 (13:30~14:30) 座長 蒲生俊敬

2A11 マリアナトラフの熱水:最初のアルビンによる潜水の結果(S10・東海大海洋)H.Craig・○堀部純男・K.A.Farley

2A12 マリアナトラフの底層水資々懸濁物(地調)○川幡穂高・三田直樹・後藤隼次・湯浅真人・白井 朗

2A13 マリアナトラフ拡大軸18°Nの熱水活動とS, O, Sr同位体比(岡山地球研)○日下部実・前田進悟・中村栄三

2A14 沖縄トラフ南西部における海水中的マンガンの分布(東海大海洋)豊田恵聖・○園田 朗・今井篤実・森島 静・岡部史郎

(14:30~15:15) 座長 児玉幸雄

2A15 沖縄トラフ伊平屋海凹における間隙水組成と熱水循環(東大海洋研)○石橋純一郎・蒲生俊敬・酒井 均

2A16 沖縄トラフ熱水ブルームの空間的・時間的変動(東大海洋研・長崎海洋気象台)○蒲生俊敬・石橋純一郎・酒井 均・金子郁雄・浦島達郎

2A17 Sonne56航海で発見された沖縄本島沖海底熱水性硫化物, 硫酸塩鉱床について(東大海洋研・地調・クラウスタル工大)○酒井 均・石橋純一郎・柳沢文孝・中村光一・P.Halbach

B会場

課題講演(環境放射能)

コンビーナー 長屋 裕・杉村行男

(09:00~10:20) 座長 長屋 裕

2B01 大気中におけるクリプトン-85(気象研究所)鈴木・款・○杉村行男・井上久幸

2B02 大気・降水中の⁷Be濃度の秋のピークとその基因について(名大水圏研・名大理)○加藤喜久雄・小尻英博・古川路明

2B03 還元環境下でのポロニウム地下水への溶出(北大水産・フロリダ州立大)○原田 晃・成田尚史・W.C.Burnett・J.B.Cowart

2B04 内湾湖沼の表層堆積物中の放射性核種分布(名大アイソトープセ・名大理)○中村俊夫・中井信之・馬場直美

(10:30~11:50) 座長 原田 晃

2B05 瀬戸内海堆積物中の¹³⁷Csと^{239,240}Puの蓄積(放医研)○中村 清・長屋 裕

2B06 日本近海海産生物中の放射コバルト, 銀とその安定元素(日本分析センター)○深津弘子・福島浩人・野中信博・高野直人・吉清水克巳・樋口英雄

2B07 ¹⁴C濃度分布から推測される海水の動き(名大理・名大アイソトープセ・広大総科)○小野田伸一・中井信之・中村俊夫・坪田博行

2B08北海道における最近の環境放射能レベル(北海道立衛研)福田一義

(11:50~12:30) 座長 中村 清

2B09 放射性核種相互の関連からみたチェルノブイリ原子力発電所事故の影響について(気象研)○廣瀬勝巳・青山道夫・杉村行男

2B10 北太平洋上大気中のチェルノブイリ放射能測定から見積もったエアロソルの滞留時間(北海道東海大工・ロードアイランド大)○植松光夫・R.A.Duce

一般講演 (13:50~14:35) 座長 中谷 周

2B11 環境放射能の大規模循環モデル(センチュリーリサーチセンター)大西輝明

2B12 河床堆積物試料の複数実験室分析結果の比較考察(地調)○伊東司郎・今井 登・田中 剛・上岡 晃

2B13 放射化分析による河川堆積物の測定結果—微量元素の地表分布例—(地調)○上岡 晃・田

中 剛・伊東司郎

2B14 土壌の可溶性セレンについて(京都府大農・京大農)○山田秀和・康 峪梅・服部共生・久馬一剛

(14:15~15:00) 座長 加藤義久

2B15 堆積物中のヒドロキシ脂肪酸の存在と地球化学的意義(都立大理)福島和夫

2B16 H²Sによる現世 Algal Matとメラノイディンへのイオウの固定(島根大理・オクラホマ大)○鈴木徳行・R.P.Philip

2B17 バテライトの表面電位に及ぼすリン酸化合物の影響(新潟大自然科学・同理)○荻野 健・中村哲郎・岡田昌二・鈴木俊雄・澤田 清

C会場

一般講演 (09:00~10:00) 座長 相沢省一

2C01 チャート中の希ガス(神戸大理 名大理)○松原佳代・松田準一・杉崎隆一

2C02 ユーラシア中緯度および北西アフリカ地域の風成石英粒子の酸素同位体組成(九大農・岡山地球研・地調)○溝田智俊・日下部 実・能登征美・松久幸敬

2C03 下部石炭系秋吉石炭岩中のCe, Nd同位体比(地調・東大理)○上岡 晃・増田彰正

2C04 太平洋, 大西洋, バルト海, バレンツ海より採集されたマンガノジュールのCeとNdの同位体比(東大理)○天川裕史・清水 洋・増田彰正

(10:00~11:00) 座長 山本剛志

2C05 西グリーンランドIsua及びGodthaab地域の鉄鉱層のCe, Nd同位体比及びREE存在度(東大理)○清水 洋・梅本 昇・中井俊一・増田彰正

2C06 茨城県阿武隈山地における希土類元素高度濃集帯の発見(地調)○田中 剛・上岡 晃・今井 登・伊藤司郎

2C07 バストネサイト等の成因に関する年代学的, 同位体的研究(東大理)○中井俊一・増田彰正

2C08 湖南州カコウ岩と佐賀県木村石のREEパターンに見られるテトラド効果(東大理・中国科学院地球化学研)○赤木 右・増田彰正・M.B.ShaBani・平田岳史・王 中剛・林 伝仙・趙 振華

(11:10~12:25) 座長 佐野有司

2C09 トルコ東部の火山岩のK-Ar年代(神戸大理・岡山地球研・M.T.A.トルコ)○松田準一・松原佳代・長尾敬介・T.Ercan

2C10 東部トルコにおけるプレート衝突境界の火山岩の地球化学的特徴(東大理・海抜大学校・神

- 料大理・M.T.A.トルコ)○野津憲治・藤谷達也・松田准一・宇井忠英・T.Ercan
- 2C11 小笠原海域のフォア・アーク・オフィオリイトの成因についての地球化学的考察(神戸大理・東大海洋研)榊谷芳嗣・○山本鋼志・中村昇・石井輝秋
- 2C12 ODP Hole504B(Leg111)で得られた海洋地殻試料のH, O, Sr, Nd同位体比(岡山大地球研・同理・東大海洋研・大阪市大理)○前田進悟・日下部 実・本間弘次・加々美寛雄・柴田次夫・山本雅弘・酒井 均・益田晴恵
- 2C13 ソロモン諸島の火山岩のCe及びNdの同位体比(東大理)○猿渡英之・清水 洋・河田陽介・増田彰正
- (13:30~14:30) 座長 野津憲治
- 2C14 ハワイ産超苦鉄質岩ゼノリスのSr, Nd, Pb同位体比(神戸大理・アメリカ合衆国地調)○岡野 修・立本光信
- 2C15 ハワイ産超苦鉄質岩ゼノリスの希土類元素組成(神戸大理・アメリカ合衆国地調)○岡野 修・立本光信
- 2C16 中国大陸産玄武岩などのREEパターン(東大理)○劉 叢強・中井俊一・清水 洋・増田彰正
- 2C17 浅間火山鬼押し溶岩流の元素組成分布(明治大工・東大地震研)○佐藤 純・中村利廣・菅原伸一・高橋春男・佐藤和郎
- (14:30~15:15) 座長 長尾敬介
- 2C18 Glass-zircon pairによる火山岩のIa年代とマグマの履歴(学習院大理)福岡孝昭
- 2C19 黒曜石中のNeの異常濃縮について(神戸大理)○松原佳代・松田准一
- 2C20 MORBガラス中の希ガス(東大理)比屋根 肇

D会場

- 一般講演 (09:00~10:00) 座長 広瀬勝巳
- 2D01 大気中の微量元素の存在状態と挙動(I)(名大水圏研)○金森 悟・金森暢子・伊佐恵理子・西川雅高
- 2D02 大気中の微量元素の存在状態と挙動(II)(名大水圏研)金森 悟・○金森暢子・伊佐恵理子・西川雅高・西尾文彦
- 2D03 大気中の金属成分の存在状態(名大水圏研)○田中雅文・金森 悟・金森暢子
- 2D04 大気中にガス状態もしくは微細粒子状態として存在している生体微量必須元素に関する研究(近畿大理工)○森田道隆・藤原一也・大河内芳則・鹿野芳弘・平木敬三

- (10:00~11:00) 座長 加藤喜久雄
- 2D05 浦和における大気降水物の化学組成(埼玉大工)○君島克憲・小沢竹二郎
- 2D06 大気粉塵中のRb, Srの測定による黄砂現象の環境大気に及ぼす影響の推定(慶応大理工)○岡森克高・尾上 勉・田中 茂・橋本芳一
- 2D07 ブラジルの熱帯・亜熱帯域大気中の有機物(名大水圏研)大田啓一
- 2D08 筑波における大気中メタン濃度の連続測定について(気象研)○松枝秀和・井上久幸・杉村行勇

- (11:10~12:25) 座長 日下部 実
- 2D09 筑波において観測された大気中のCO₂濃度の時間変化(気象研)○井上久幸・杉村行勇
- 2D10 重力のもとでの気体の熱平衡状態(学習院大理)木越邦彦
- 2D11 コハク中の気体濃度(東海大海洋・S10)○堀部純男・H.Craig
- 2D12 筑波山における降水中の安定同位体比の季節変動(筑波大地球科学・同水理実験センター・岡山大地球研)○三条和博・嶋田 純・日下部 実
- 2D13 雨水中の有機酸濃度の測定及びその濃度分布(慶応大理工)○安江憲介・桂 央也・田中茂・橋本芳一

- (13:30~14:30) 座長 松枝秀和
- 2D14 日本各地における雨水中の微量セレンの状態別定量及び濃度分布(慶応大理工)○中村 優・大高 諭・田中 茂・橋本芳一
- 2D15 降水中の水銀の挙動(千葉大理)中川良三
- 2D16 降雨中の微量元素の挙動(武蔵工大原研)○仙波康之・平井昭司
- 2D17 富山地方における降雪の安定同位体組成に関する内陸降下について(富山大理)水谷義彦

- (14:30~15:15) 座長 植松光夫
- 2D18 冬期日本海側の降雪の酸素同位体組成に関するモデル(名大水圏研)○杉本敦子・樋口敬二
- 2D19 北太平洋西部における大気中のCO₂濃度について(気象研)○井上久幸・杉村行勇
- 2D20 太平洋上における大気中メタンの緯度分布について(気象研)○松枝秀和・井上久幸・杉村行勇

特別会場

- 記念講演 (15:30~16:15) 座長 北野 康
日本地球化学会の25年一回顧と展望 松尾禎士
- 総会 (16:30~17:30)

第3日(10月14日)

A会場

- 一般講演 (09:00~10:00) 座長 茂野 博
- 3A01 群馬県湯ノ小屋温泉の湧出状況(中央温泉研)佐藤幸二
- 3A02 湯ノ小屋温泉のマンガン沈殿物(東北大教養・群馬県衛研)○鈴木励子・酒井幸子
- 3A03 山梨県増富温泉地域における沈殿堆積物の化学組成(地調)金井 豊
- 3A04 放射化分析法による白骨(中性)及び玉川(酸性)温泉水中の希土類元素の定量(上智大理工・武蔵工大原研)○木川田喜一・小坂知子・大井隆夫・垣花秀武・本多照幸・野崎徹也

- (10:00~11:00) 座長 山本雅弘
- 3A05 台湾北投温泉の微量成分濃度と北投石の化学組成との関係について(香川大教育・東大教養)○佐々木信行・綿抜邦彦
- 3A06 タイ北部地熱地域の地球化学的研究(秋田大鉱山・岡山大地球研)○北 逸郎・長尾敬介・高島 勲・本多朔郎
- 3A07 セロ・プリエト, ザ・ガイサース, ソルトン・シー地熱地域のCO₂, CH₄, H₂の炭素, 水素同位体組成(地調)茂野 博
- 3A08 直接酸添加真空抽出法による地熱水中のΣCO₂の定量と炭素同位体分析(地調)○茂野 博・阿部喜久男

- (13:30~14:30) 座長 松久幸敬
- 3A09 石英の溶解を既成する要因について(東大生産研・地質鉱物エンジニアリング)○白木亮司・小林一輔・丸 章夫
- 3A10 熱水中における硫化鉱物の形成反応(函館工専)○水上正勝・大森幸子
- 3A11 熱水溶液の気, 液二相分離に伴うHClの分配(東工大理・東大理)○篠原宏志・藤本光一郎
- 3A12 熱水(T≤500℃, P≤1Kb)に溶けたH₂Sの熱力学的性質(岡山大学地球研)○木島宣明

- (14:30~15:30) 座長 木島宣明
- 3A13 酸性溶脱と金鉱化作用(地調)○松久幸敬・青木正博
- 3A14 黄鉄鉱の熱分解における微量セレンの挙動について(岡山大理)○山本雅弘・水間隆二・石井勝志
- 3A15 地球深内部のSulfide Ore Magma(筑波大地球科学系)梶原良道
- 3A16 オクロ天然原子炉における核分裂生成物の挙動について(熊本大工・東大理)○日高 洋・小西 隆・清水 洋・増田彰正

B会場

- 一般講演 (09:00~10:00) 座長 杉崎隆一
- 3B01 ブラジル・カタロンのカーボナタイト岩体におけるラテライト風化土壌の化学組成(東大理・大阪市大理・サンパウロ大・ブラジルGoiasfertitl)○豊田和弘・堀内弘之・小澤徹・芳賀信彦・床次正安・相川信之・K.Fujinori・C.Cordeiro
- 3B02 熱変成堆積岩中の有機物質の水素・炭素・酸素同位体比(富山大理・岡山大地球研)○吉田尚弘・中尾竜太・能登征美・水谷義彦
- 3B03 大陸地殻の平均的同位体組成について—黄河流域堆積岩類による推定—(地調)○田中 剛・安藤直行

- 3B04 先カンブリア時代の珪質及び鉄質の堆積物(名大理)○玉井ます美・杉崎隆一・足立 守
- (10:00~11:00) 座長 渡久山 章
- 3B05 堆積岩中のマンガンバンド(I)。海洋堆積および陸上堆積岩から産出するマンガンバンドの産状とその地質学的意義(名大理)○杉崎隆一・杉谷健一郎・足立 守・川村忠志
- 3B06 堆積岩中のマンガンバンド(II)。マンガンバンドの化学的特徴(名大理)○杉谷健一郎・杉崎隆一・足立 守・川村忠志
- 3B07 沖縄の珊瑚礁における炭酸カルシウム生産(琉球大理)大出 茂
- 3B08 石垣島における紀元前の大規模津波襲来の可能性(琉球大理・名大理・同アイソトープセ)○平良初男・上地裕光・中井信之・中村俊夫

- (13:30~14:30) 座長 豊田恵聖
- 3B09 ODP Leg116(ベンガル湾)の間隙水中の重金属とアミノ酸について(東大海洋研・地調)○石塚明男・児玉幸雄・川幡穂高
- 3B10 Sonne51航海(ベンガル湾)における間隙水の栄養塩と重金属について(東大海洋研・ハンブルグ大)○石塚明男・児玉幸雄・V.Ittekkot・S.Brand
- 3B11 堆積物と間隙水中のアミノ酸—コスタリカリフト, ODP Holes 677と678(地調・東大海洋研)○川幡穂高・石塚明男・青木三郎
- 3B12 コスタリカ海嶺で得られた基盤岩直上の堆積物中の熱水変質鉱物(大阪市大理・東大海洋研)○益田晴恵・酒井 均

- (14:30~15:15) 座長 佐々木信行
- 3B13 沖縄トラフにおける柱状堆積物の化学元素の分布(東海大海洋)豊田恵聖・○木村至孝・岡部史郎
- 3B14 神奈川県東部に分布する酸性泥岩の特徴につ

- いて(神奈川県温泉地学研・横浜国大・筑波大)
○石坂信之・島 誠・坂本吉宏・杉山茂夫・大
木靖衛
3B15 酸性泥岩の地球化学的検討について(横浜国
大・神奈川県温泉地学研・筑波大)○島 誠・
石坂信之・坂本吉宏・大木靖衛

C会場

- 一般講演 (09:00~10:00) 座長 兼岡一郎
3C01 第四紀火山岩のK-Ar年代測定(地調)○松本
哲一・宇都浩三・柴田 賢
3C02 断層ガウジの年代測定—中央構造線の例(地
調)○柴田 賢・内海 茂・青山秀喜
3C03 段階加熱によるAr脱ガス実験とK-Ar年代(岡
山大地球研・岡山理大・鳴門教育大)○長尾敬
介・伊藤秀人・高橋 勝
3C04 テルル128および130のダブルベータ崩壊(山
形大理・科学博物館)佐川 斉・高岡宣雄・島
正子
(10:00~11:00) 座長 高岡宣雄
3C05 酸素フュガシティー計としての斜長岡-マグマ
間のMg-Fe分配(広大総科)佐藤博明
3C06 コンドライトマントル系におけるmajorite/
melt間の元素分配(愛媛大理)○森山純子・大
谷栄治・川辺岩夫
3C07 Garnet, majorite/silicatemelt間の元素分配係
数とその地球化学的意義(愛媛大理)○川辺岩
夫・森山純子・大谷栄治・藤野清志
3C08 地球深部における揮発性元素について—その
問題点(東大地震研)兼岡一郎
(13:30~14:30) 座長 田中 剛
3C09 ザイール産cubicダイヤモンド中の不純物(東
大理)○赤木 右・増田彰正
3C10 ザイール産ダイヤモンドの⁴⁰Ar-³⁹Ar年代(東
大理・関東学園大)○小嶋 稔・座主繁男・滝
上 豊
3C11 Xe同位体比異常と地球初期のカタストロ
フィック脱ガス(東大理)○五十嵐丈二・小嶋
稔
3C12 カルサイト表面へのリン酸化物の吸着及び表
面電位(新潟大理)○澤田 清・岡田昌二・鈴
木俊雄
(14:35~15:35) 座長 澤田 清
3C13 溶存イオンの炭酸カルシウムの結晶形に対す
る影響(琉球大理)○渡久山 章・比嘉清喜・
那須浩二・伊集守道
3C14 炭酸カルシウムの生成、転移におけるポリリ
ン酸の吸着機構(新潟大理)○関野博一・鈴木

- 俊雄・澤田 清
3C15 二枚貝の外套液—貝殻間の元素の分配(愛知
教育大・都立科技大)○吉岡小夜子・寺井 稔
3C16 地球化学的手法の疾病診断への応用(都立科
技大・愛知教育大・国立松本病院)○寺井稔・
吉岡小夜子・野呂瀬 昇

D会場

- 一般講演 (09:00~10:00) 座長 太田啓一
3D01 海洋大気中のメタンスルホン酸の測定(慶応
大理工)○田中 繁・出田恵三・橋本芳一
3D02 海洋エアロゾル中のカルボン酸:光化学反応
および陸性有機物のトレーサー(都立大理・
ウッズホール海洋研)○河村公隆・R.G.Gago-
sian
3D03 地球規模での有機塩素化合物汚染の推移(愛
媛大農)○立川 涼・田辺信介・河野公栄・脇
本忠明・山口之彦
3D04 熱帯における化学物質のゆくえ—インドでの
調査—(愛媛大農・Annamalai Univ. India)○
立川 涼・田辺信介・本田克久・
An.Subramanian・V.Venugopalan
(10:00~11:00) 座長 河村公隆
3D05 野川流域の湧水、地下水、大気中のラジウム、
ラドン(都立大理・山梨医大RI研 北里環境科
学セ)○堀内公子・石井 忠・村上悠紀雄
3D06 山地小流域の降水と流出水の同位体組成につ
いて(京大理・富山大理・京大防災研)○斎藤
隆志・水道義彦・奥西一夫
3D07 塩類水溶液における気液二相間の水の酸素同
位体分別(学習院大理)○垣内正久・奥津公也・
仁木達也
3D08 最終氷期における氷床氷の δ -¹⁸Oと分布の変
動(I)(名大水圏研)加藤喜久雄
(13:30~14:45) 座長 松永捷司
3D09 都市郊外の沢木に含まれる塩化物イオンの起
源(東工大総合理工)○鶴見 実・高橋 章・
一國雅巳
3D10 フレームレス原子吸光分光法による天然水の
微量リチウムの定量(東邦大医)○加藤尚之・
高松信樹・今橋正征・相川嘉正
3D11 酪農土壌と河川湖沼水質の関係(予報)(酪農
学園大)○篠原 功・雉子谷由美・上野靖子・
原田 勇
3D12 水環境中での化学物質の挙動の解析手法—湿
地帯でのLASを例として(国公研)○稲葉一穂・
岩崎一弘・矢木修身
3D13 木崎湖の硝化に伴うN₂Oの蓄積(名大水圏研)

- 楊 宗興
(14:45~16:00) 座長 高松信樹
3D14 琵琶湖における閉鎖系実験I(名大水圏研・
琵琶湖研)○松永捷司・高橋幹夫・半田暢彦
3D15 琵琶湖における閉鎖系実験II(名大水圏研・
琵琶湖研)○松永捷司・高橋幹夫・半田暢彦
3D16 東京都における地下水中の硝酸イオンの分布
(東工大総合理工)○松原克志・鶴見 実・一
國雅巳
3D17 岐阜県各務原台地における地下水のかん養源
について(岐阜県衛研・名大水圏研)○寺尾
宏・加藤喜久雄
3D18 アクチバブルトレーサを用いたカルスト台地
における地下水流動調査(九州環境管理協会・
北九州市役所)○岡村正紀・松岡信明・白石直
典・吉永高敏・福田 力

ポスターセッション(掲示:会期中, 討論時間:10
月14日 11:30~12:45)

課題セッション(地球化学研究と新技術)
コンビーナー 増田彰正

ポスターA会場 討論司会 増田彰正

- PA01 ICP質量分析計によるLi同位体比の測定の試み
(東大理)○M.B.Shabani・増田彰正
PA02 ICP質量分析法によるRe-Os法の開発:分析精
度の向上(東大理)○平田岳史・清水 洋・増
田彰正
PA03 グロー放電質量分析計(GDMS)の地球化学
試料への応用(丸文)○加賀谷隆子・島村 匡
PA04 中性子放射化による数千の地球化学的試料の
多元素自動分析(地調)○田中 剛・上岡 晃
PA05 大気球搭載用成層圏大気採取システム(宇宙
科学研・東大海洋研)本田秀之・○堤 真・伊
藤富造
PA06 都市大気中に存在する低分子ジカルボン酸の
分布(都立大理)○河村公隆・幾島浩一
PA07 イオンクロマトグラフィーを用いた環境試料
中の有機酸の測定(慶感大理工)○田中 茂・
安江憲介・出田恵三・橋本芳一
PA08 Total Evaporation Static Multicollection-A Ne
w Approach to Isotope Ratio Measurements fo
r Elemets of Geochemical Interest by Thermal
Ionization Mass Spectrometer.(Finnigan Mat
・E.I.T.E) H.Mano・J.Joheinko・
R.Vocke・M.Romkowski・G.Wagner
PA09 燃焼分解法と同位体希釈質量分析法によるダ
イヤモンドの地球化学的研究法の開発(東大理)
○赤木 右・増田彰正

ポスターB会場 討論司会 山本 学

- PB01 新しい電気化学的手法による海水中のヨウ素
とマンガンの自動分析法(京大理)中山英一郎
PB02 海水溶存メタン自動分析計の製作(東大海洋
研・国公研・電気化学計器)○石橋純一郎・野
尻幸宏・前田恒昭
PB03 ICP-MSによる海水中のSbの同位体比の測定
(広大理・同工・同総科・パーキンエルマー
ジャパン)○山本 学・熊丸尚宏・中田文夫・
坪田博行・錦田晃一
PB04 海洋環境試料のPIXE法による分析(放医研)
○石川昌史・長屋 裕
PB05 ICP-MSによる河川水分析(丸文・農業環境技
研)○高久雄一・山崎慎一・島村 匡
PB06 天然水中の無機イオン類の新検出法の開発—
分光法を中心として(広大総科)○藤原祺多夫・
坪田博行
PB07 底水層環境計測システム(中工試)○谷本照
巳・川名吉一郎・星加 章
PB08 海底熱水系探査装置の開発と試作(広大総科・
東大海洋研・室工大・環境計測システム・日油
技研)○坪田博行・酒井 均・中井俊介・室住
正世・竹沢 信・梅沢道春・古田俊夫・蒲生俊
敬・深沢理郎・下島公紀

一般セッション 討論司会 安藤 厚

- PG01 北極スピッツベルゲン島における氷床コア—
からの古環境情報(京大理・極地研)○神山孝
吉・藤井理行
PG02 河川水中の金属との錯体形成に関わる有機物
についてI 限外ろ過による分画(都立大理・
都立アイソトープ研)○福島和夫・畔柳佳代
子・山崎正夫
PG03 新潟市およびその周辺部の環境放射能(新潟
薬大)○柏森伸子・村上直行・小西徹也
PG04 本邦2, 3の火山におけるガス組成とイオウ
同位体比(岡山地球研・東工大草津火山観)
○日下部 実・平林順一
PG05 GSF岩岡標準試料1988(地調)○安藤 厚・寺
島 滋・金井 豊・岡井貴司・三田直樹
PG06 秋田県銭川温泉における3成分混合モデルに
ついて(秋田県衛研・秋田大鉱山)○武藤倫子・
勝又貞一・松葉谷治
PG07 熱水条件下における岩石標準試料(JR1, JB2)
と海水の反応(東大海洋研・地調)○柳沢文孝・
酒井 均・青木正博・松久幸敬
PG08 熱水条件下における岩石標準試料(JR1, JB2)
と地下水の反応(東大海洋研・地調)○柳沢文

- 孝・酒井 均・青木正博・松久幸敬
- PG09 地熱熱水から生成したケイ酸質沈殿物中の希土類元素(九大理・九大総合理工)○横山拓史・八浪竜一・樟谷俊和
- PG10 現在と過去の海洋プレート形成に伴う熱水活動—ODP Hole 504B, CYPRUS—(地調・トロント大)○川幡穂高・S.D.Scott

懇親会 10月13日(木)18時~20時, 広島大学会館大集会室。

要旨集代 (1冊)4,000円

問合せ先 〒730 広島市中区東千田町1-1-89, 広島大学総合科学部 1988年度日本地球化学会年会準備委員会 坪田博行(電話(082)241-1221, 内線2215, 3570)

~~年会に関連するお知らせ~~

○中国工業技術試験所の瀬戸内海大型水理模型見学について

1. 10月14日(金)10:00あるいは14:00に来所される方に対しては, 当所の概要をビデオで紹介し, 説明者をつけて実験中の模型内を案内します。時間は約1時間です。
2. 10月12日(火)と13日(木)は実験を行っていない(潮の流れがない)予定ですが, それでもよければ14:00に来所していただければ, 専門外の職員になると思いますが案内します。
3. 他の時間帯は御遠慮下さい
4. 交通 JR広島駅から呉線, 広まで。都合のよい列車: 広島発8:58—広島着9:43, 広島発12:58—広島着13:43。広駅からタクシーで約5分, 帰りのJRは20分間隔で広島方面行があります。

○年会期間中に, 研究会など各種集会を予定しておられる方, 又は団体の世話人の方は, 開催日時, 会場の広さなどを10月1日までに, 年会準備委員会へ申し出て下さい。適当な部屋を準備します。

○年会期間は, 修学旅行や中国山地の紅葉狩の時期です。宿の予約や旅行計画は早めにして下さい。

年会風景の写真を募集しています!

過去の年会の風景やエキスカージョンのスナップ写真をお送りください。

締切り 9月10日(土)

「1989年度日本地球化学会春季シンポジウム」の御案内

主催 日本地球化学会

日時 1989年4月10日(月)

会場 東京大学山上会館

詳細については次号のニュースでお知らせ致します。

連絡先 〒113 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学理学部化学教室
増田 彰正

電話 03-812-2111 (内線)4349

FAX 03-814-2627

シンポジウム「隕石と太陽系の起源」開催のお知らせ

共催 科学研究費補助金・重点領域研究
「原子太陽系と惑星の起源」総括班,
日本地球化学会

日時 1989年4月11日(火)

会場 東京大学山上会館

(詳細については後日御連絡致します)

連絡先 〒113 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学理学部化学教室
増田 彰正, 清水 洋

電話 03-812-2111 (内線)4349, 4350

記

日本宇宙生物科学会第2回大会

1. 期日 昭和63年11月20日(日)および21日(月)
2. 会場 東京医科歯科大学 5号館 講堂
3. シンポジウム 「宇宙と生物とカルシウム」
「スペースコロニー」

4. 一般講演
園外生物学, 重力生物学, 放射線生物学, 宇宙基礎医学, 生体系観測, 宇宙農学, CELSS, 宇宙生物工学, 宇宙実験工学および宇宙と生物科学に関連する境界領域

5. シンポジウムおよび一般講演演題募集
演題および講演要旨締切 昭和63年9月15日(木)

申込宛先: 〒229 神奈川県相模原市由野台 宇宙科学研気付

日本宇宙生物科学会事務局

連絡先 〒113 東京都文京区湯島 1-5-45

東京医科歯科大学

歯学部第2理工学教室

日本宇宙生物科学会第2回大会会長

佐藤 温重

TEL (03) 813-6111 (内線5150-5152)

地球——ダイナミックな躍動

プログラム(案)

日時: 昭和64年1月30日(月)~2月1日(水)

会場: 経団連ホール

1月30日(月)

A 挨拶 9:50~10:00

第3回『大学と科学』公開シンポジウム組織委員会
文部省

B 地球内部に於ける物質移動と変化

10:00~17:15

司会 大阪産業大学教授 森 本 信 男

東北大学教授 青 木 謙一郎

1. 原子の動きと地球の変化
東京工業大学教授 丸 茂 文 幸

2. コンピューターで作る水晶とその仲間
岡山大学教授 松 井 義 人

3. 顕微鏡下でマグマを見る
東北大学名誉教授 砂 川 一 郎

4. 火山はどうしてできるか
東京大学教授 久 城 育 夫

5. 地球内部の動きを把握する
東京大学教授 熊 澤 峰 夫

6. ダイヤモンドの年代: その惑星科学的意義
東京大学教授 小 嶋 稔

1月31日(火)

C 地質学的時間を測る

10:00~12:00

司会 (未 定)

1. 微量の放射性炭素で年代を測定する
名古屋大学教授 中 井 信 之

2. 長寿命放射性核種の地球化学的研究の最近の進歩
東京大学教授 増 田 彰 正

D 地殻の表層・水の動き

13:00~17:15

司会 (未 定)

1. 琵琶湖底に秘められた変遷の歴史
京都大学教授 堀 江 正 治

2. 地下水の挙動
筑波大学教授 榎 根 勇

3. 古地震の復元—地形学的方法によるアプローチ—
横浜国立大学教授 太 田 陽 子

4. 地球史の中の有機物を探る
東京都立大学教授 石 渡 良 志

2月1日(水)

E 変化する地球と人間とのかかわり

10:00~17:15

司会 (未 定)

1. コンピューターの中の地図

お茶の水女子大学講師 久 保 幸 夫

2. 宇宙からのリモートセンシングデータの高次利用
東京大学教授 高 木 幹 雄

3. 熱帯の自然と人間居住—三大陸比較の視点から—
広島大学教授 篠 原 健 蔵

4. 水界生物の相互作用
—メソコスム(隔離水界)による実験的解析—
愛知大学教授 西 條 八 東

5. 高温岩帯からの熱エネルギーの抽出
東北大学教授 阿 部 博 之

6. 地球内部の熱と物質の活用
東北大学教授 高 橋 秀 明



IMA 1990
15th
General Meeting
of the
International
Mineralogical
Association
28 June-3 July 1990
Beijing China

Sponsored by
Geological Society of China
Chinese Society of Mineralogy, Petrology
and Geochemistry
Chinese Academy of Geological Sciences

ORGANIZING COMMITTEE

Chairman: Xie Xiande

1st Vice Chairman: Ji Kejian

Vice Chairmen: Yang Minzhi, Shen Jinchuan

Secretary-General: Wang Zejiu

Deputy Secretaries-General: Cai Wenyan, Song Xue
xin

SCIENTIFIC PROGRAM

The program will include symposia and plenary lectures organized by Commissions, Working Groups and the Program Committee. A joint symposium on selected interdisciplinary topics will be held jointly with the International Association of Geochemistry and Cosmochemistry. There will be oral and poster sessions organized according to the subjects of contributed papers. Complete details will be given in the Second Circular and in some mineralogical journals.

IMPORTANT DATES

Second Circular:	February, 1989
Abstract deadline:	31 December, 1989
Preregistration deadline:	28 February, 1990
Third Circular:	April, 1990

第29回IGC (1992, 日本) 科学プログラム準備委員会報告

1988年6月24日

久城育夫

第5回科学プログラム準備委員会を4月23日に東京大学総合研究資料館において開催した。ここでは主としてシンポジウムテーマ第2次案について詳細に検討し、第3次案を決定した。本準備委員会としてはこれを最終案とし、関係者に広く意見を求めた上、それらを添えて近く設置されるであろう正式の科学プログラム委員会に申し送る予定である。

以下に第1回から第5回まで行われてきた本準備委員会の討議の経過の概略、並びにシンポジウムテーマ第3次案を報告する。このシンポジウムテーマおよび科学プログラムについての御意見は幹事の歌田実(東京大学総合研究資料館, 地球科学系)又は吉田鎮男(東京大学理学部, 地質学教室)までお寄せいただければ幸いである。

- (1) 科学プログラム準備委員会は、当初、東京大学理学部、飯山敏道(現千葉大理学部)を委員長とし委員9名と幹事1名の11名により構成され昭和62年2月27日に第1回委員会を開催した。第3回より委員長を東京大学理学部、久城育夫と交替し、第5回まで委員会を開催した。途中委員及び幹事の交替があり、現在の構成は最後に記したとおりである。
- (2) 科学プログラム全体のメインテーマはIGCが日本で開催される意義が明かになるように“Earth Sciences of Island Arcs and Active Continental Margins”とすることにした。
- (3) 会場のスペースと参加人数を勘案し、口頭発表は全部シンポジウムとし、それ以外はポスター発表とすることにした。ただし、アブストラクトなどの扱いは両者を対等とする。この他、ワシントンの第28回IGCの例にならい、WorkshopsとShort Coursesも計画することにした。
- (4) シンポジウムテーマは現段階では120程度準備し、学問内容の進展をみながら2nd circularまで手直しすることにした。また、国際学会などから推されるテーマについては関係学会と協議の上、加えることにした。
- (5) シンポジウムテーマはできるだけ記載的なものをさけ、成因、メカニズム、ダイナミクスなどに重点をおいた魅力的なものを選ぶことを基本方針とした。
- (6) 特別シンポジウムとして、日本の地質を外国人参加者に紹介する“Geology of Japan (仮題)”を1日程度行うこと、地質図を含む適当な出版物を企画することにした。
- (7) この他の特別シンポジウムとして、次のものを加えることにした。
 - I) Evolution of Island Arcs
 - II) Mantle Dynamics
 - III) ODP, DELP (正式名ILP), IGBP, KAICOなど国際的プロジェクトの総括シンポジウム
- (8) 各シンポジウムは講演数や内容分野の広さなどが必ずしも画一的でなくてもよいこととした。
- (9) ポスター発表は区分を大きくし、発表希望者全員が参加できるよう工夫することとした。
- (10) WorkshopsとShort Coursesに関しては広く募集した上で、シンポジウムやポスター発表と調整することとした。
- (11) 以上の経過をふまえ、本準備委員会での最終案(第3次案)としたシンポジウムの区分とテーマは下記のとおりである。

Symposia of the 29th International Geological Congress

Proposed by the preparatory program committee for the 29th IGC
May 17, 1988

Sections

- 0: Special Symposia
- 1: Stratigraphy
- 2: Sedimentology and Sedimentary Petrology
- 3: Structural Geology and Tectonics
- 4: Paleontology
- 5: Geochronology
- 6: Marine Geology
- 7: Quaternary Geology
- 8: Volcanology
- 9: Igneous Petrology
- 10: Metamorphism and Metamorphic Petrology
- 11: Planetary Sciences
- 12: Mineralogy
- 13: Clay Geosciences
- 14: Mineral Resources
- 15: Fuel Deposits
- 16: Geothermal Studies
- 17: Engineering Geology and Hydrology
- 18: Environmental Geology
- 19: Natural Hazards
- 20: Mathematical and Information Geosciences
- 21: History of Geosciences
- 22: Geological Education
- 23: Miscellaneous
- 00: Symposia for international projects

0: Special Symposia

- 1) Evolution of island arcs.
- 2) Mantle dynamics.
- 3) Geology of Japan.

1: Stratigraphy

- 1) Chronostratigraphic framework and correlation of the Cenozoic Erathem.
- 2) Cenozoic climatic changes in the Pacific region.
- 3) Major epoch boundaries.
- 4) Radiolarian events in the Tethyan realm.
- 5) Fusulinacean biostratigraphy and paleogeography.
- 6) Paleozoic and Mesozoic terranes in the circum-Pacific region.
- 7) Sinian world.

2: Sedimentology and Sedimentary Petrology

- 1) Sedimentary cycles and their origin.
- 2) Modeling and analysis of sedimentary basins.
- 3) Petrographic types of sandstones related to tectonics.
- 4) Sedimentology of deltaic, fluvial and lacustrine deposits.
- 5) Bedforms, sedimentary structures and sediment transport.
- 6) Compaction and cementation of coarse-grained sediments.
- 7) Mechanism and environments of deposition of fine-grained siliceous rocks and bedded cherts.
- 8) Sedimentation and diagenesis of volcanoclastic sediments.
- 9) Sedimentation and diagenesis of carbonates.

3: Structural Geology and Tectonics

- 1) Structural histories in western Pacific and Asian continent.
- 2) Accretion and subduction tectonics.
- 3) Extensional tectonics in continents and arcs.
- 4) Mud diapir, tectonic melange, and olistostrome.
- 5) Cauldron tectonics; block faulting and collapsing.
- 6) Fault mechanisms and fault related structures.
- 7) Deep crustal structures of orogenic belts and continents.
- 8) Rheological and structural aspects of deformed and metamorphosed rocks.
- 9) Theoretical and experimental approaches to rock deformation.

4: Paleontology

- 1) Morphogenesis and functional morphology of invertebrates.
- 2) Early ontogeny and formation of hard tissues in fossil organisms.
- 3) Computer simulation and theoretical modeling of fossil morphology.
- 4) Historical development of benthic community structures.
- 5) Cenozoic paleobiogeography of the western Pacific.
- 6) Taxonomy and evolutionary development of Asian terrestrial vertebrates.
- 7) Evolution and migration of marine mammals in the Pacific realm.

- 8) Evolutionary processes of planktonic biota in marginal seas.
- 9) Radiation and extinction events in fossil biota.

5 : Geochronology (in preparation)

6 : Marine Geology

- 1) Geology and tectonophysics of trench subduction zones.
- 2) Origin and evolution of microplates, backarc basins and marginal seas.
- 3) Deep-sea events and sedimentary records. - anoxic events, gas hydrates, fluid venting.
- 4) Ocean circulation (surface and bottom) and sedimentary records.
- 5) Bio- and litho-facies models in space and time.
- 6) New techniques in marine geology and geophysics.

7 : Quaternary Geology

- 1) Quaternary stratigraphy and chronology in the Pacific and Asian regions.
- 2) Quaternary dating methods.
- 3) Sea-level and climatic changes in the Quaternary.
- 4) Quaternary tectonics.

8 : Volcanology

- 1) Volcanic eruption : case studies and dynamics.
- 2) Volcaniclastic flows.
- 3) Submarine volcanism.
- 4) Calderas.
- 5) Prediction of volcanic eruption.

9 : Igneous Petrology

- 1) Magma genesis in island arcs and continental margins.
- 2) Intraplate magmatism.
- 3) MORB genesis.
- 4) Large-volume felsic volcanism.
- 5) Granite in island arcs and continental margins.
- 6) Petrology and geochemistry of ophiolite.
- 7) Ultramafic rocks in island arcs and continental margins.
- 8) Experimental petrology and magma genesis.
- 9) Experimental and theoretical studies on dynamics

of magma chamber and conduit.

10 : Metamorphism and Metamorphic Petrology

- 1) Development of island arc metamorphic rocks in time and space.
- 2) Petrology of high pressure metamorphic belts : their P-T-t path.
- 3) Metamorphism in continental crust.
- 4) Developments of texture of metamorphic rocks.
- 5) Geothermometry and geobarometry : experimental and theoretical aspect.
- 6) Migmatites and high-grade metamorphic rocks.
- 7) Material transfer in the crust.
- 8) Modeling of regional metamorphic regime.

11 : Planetary Sciences

- 1) Petrology, mineralogy and geochemistry of Antarctic meteorites.
- 2) Experimental planetology and cosmic mineralogy.
- 3) Comparative planetary geology.

12 : Mineralogy

- 1) New minerals and mineral data.
- 2) Rock-forming minerals : structures, properties and phase relations.
- 3) Dynamic recrystallization.
- 4) Computational physics applied to mineralogy.

13 : Clay Geosciences

- 1) Formation of clay minerals during diagenesis, weathering and hydrothermal alteration.
- 2) Interaction of clays and organic matters.
- 3) Physics and chemistry of clay minerals.

14 : Mineral Resources

- 1) Evolution of ore deposit types through geological time.
- 2) Geochemistry of ore-forming and alteration processes.
- 3) Past and present sea-floor sulfide mineralization.
- 4) Concentration of metals in magmatic systems.
- 5) Epithermal gold in the island arc setting.
- 6) New exploration methods for blind ore deposits.

15 : Fuel Deposits

- 1) Fuel resources in the island arc setting.
- 2) Hydrocarbon accumulation in connection with volcanic activity.
- 3) Coalification and coal petrology.
- 4) Modeling of hydrocarbon generation and accumulation.
- 5) Advanced methods for petroleum exploration.

16 : Geothermal Studies

- 1) Heat flow and geothermal regimes in island arcs and continents.
- 2) Modeling of geothermal systems.
- 3) Volcanism and geothermal activity.
- 4) Submarine hydrothermal system.
- 5) Geothermal exploration.

17 : Engineering Geology and Hydrology

- 1) Land-use planning and underground space use.
- 2) Long-term change of rock mass characteristics.
- 3) Regional hydrology.
- 4) Groundwater control in fractured rock mass.
- 5) Water resources management.

18 : Environmental Geology

- 1) Management of toxic and non-toxic wastes.
- 2) Management of radioactive wastes.
- 3) Geological environments for human health and activities.

19 : Natural Hazards

- 1) Earthquake and volcanic hazards; past and present.
- 2) Landslide, debris flow and mass movements; past and present.

20 : Mathematical and Information Geosciences

- 1) Statistical treatment of geological data and their applications.
- 2) Application of artificial intelligent-database, image processing, CAD, CAI and other expert systems to geosciences.

21 : History of Geosciences (in preparation)
(e.g. Progress of geological sciences in developing countries.)

22 : Geological Education (in preparation)

23 : Miscellaneous

00 : Symposia for international projects

ODP, ILP(DELPA), IGBP, KAIKO

[付] プログラム準備委員会の構成

委員長 久城育夫

幹事 歌田実, 吉田鎮男

委員 青木謙一郎, 石原舜三, 斎藤常正, 小川克郎, 飯島東, 米谷盛寿郎, 小島圭二, 玉木賢作, 丸茂文幸, 水谷伸治郎, 鎮西清高, 坂野昇平, 岡田博有

1988年度第1回日本地球化学会評議員会議事録

日時: 1988年2月13日 17時30分~20時

場所: 赤門学会会館

出席者: 一國雅巳会長, 綿拔邦彦副会長, 石渡良志, 大隈多加志, 小倉紀雄, 小嶋 稔, 梶原良道, 兼岡一郎, 木越邦彦, 杉崎隆一, 高野稔一郎, 田中 剛, 角皆静男, 坪田博行, 中山英一郎, 野津憲治, 増田彰正, 松久幸敬, 各評議員, 鳥居鉄也監事

I. 前回の議事録を一部修正して承認した。

II. 幹事会(高野評議員)

* G. J. 誌1988年(Vol.22)以降の編集体制と方針について検討した。

* 関東地区以外の評議員の評議員会出席のための交通費の取扱いについて方針を決めた。

2. 庶務(高野評議員)

* 日本学術会議会員候補者として本会から増田彰正評議員を推薦する旨の書類を日本学術会議宛発送した。

* 1988年度地球化学会費および奨励賞の募集要項を印刷しニュースに同封して会員に発送した。

3. 会計(野津評議員)

* 春季シンポジウム費として実行委員会へ10万円の支出を認めた。

* 1987年度の決算報告は学会事務センターの業務が遅れているので報告できない。

* 今年度は関東地区以外の評議員へ交通費の半額を支払うことにした。

4. 編集

(一国会長)

* G. J. Vol.21<3>は発行済み。<4>は再校の段階、<5>は4編の論文掲載の予定、<6>については現状ではページ割れの恐れがある。投稿を求めたい。

(松久評議員, 新G.J.編集委員長)

* G. J. Vol.22以降の投稿原稿は4編ある。さらに投稿を望みたい。

* 新しい編集体制および編集方針を準備中である。臨時投稿規定(別紙)を作成したのでVol.22<1>に掲載する。

(石渡評議員)

* 『地球化学』21巻2号は発行済み。22巻1号は「海洋底熱水活動」特集号として約100ページの予定で6月に発行予定である。

(松久評議員)

* ニュース112号は春季シンポジウムプログラムなどを掲載し、2月12日に発行した。

5. 行事

(坪田評議員)

* 1988年度年会(広島大学)参加申込要項を、「化学と工業」5月号およびニュース113号(5月)に掲載する。会期は10月12-14日、講演申し込み締切は6月25日、講演要旨締切日を8月20日としたい。7月半ばまでにプログラムを作成し、ニュース(114号)および「化学と工業」に掲載する。今年は地球化学会設立25周年に当たるので年会風景の写真展を催したい。特別講演、課題討論題目については未定である。

(小倉, 綿抜評議員)

* 1988年度春季シンポジウムを4月7日東京大学教養学部において開催予定である。河村公隆(都立大理)、植松光夫(北海道東海大)、一國雅巳(東工大総合)、川幡穂高(地調)、神沼克伊(極地研)の五氏に招待講演をお願いする。また初めての試みとしてポスターセッションを設ける予定である。東大教養としては実行委員会としての幹事会の支援をお願いする。詳細はニュース(112号)に掲載した。

(一国会長)

* 1989年度地球化学会年会開催地の候補地については現在交渉中である。日程的によい期日を取るためには数年先までの予定地を決めておくのがよいとの意

見が出され、検討することとした。

6. 陸水研連関係(小倉評議員)

昭和62年2月、12月に委員会が開催され、IHP、IGBTへの対応について協議した。アメリカAGU関係者から日本で発行されている水文関係雑誌の調査以来があり、本会のG. J. と地球化学を報告した。

7. その他

学会会議ではIGBPで取り上げるべき課題について各研連に提出を求め、日本が主導できる課題を探っている。10月に中国で総会がありプロジェクト開始となる予定。早くして1989年4-5月頃学会議総会に掛かる。その後各研連を通して本会に接触があるであろう(角皆評議員)。

Ⅲ. 議事

1. 入退会

* 入会(15名) 猪狩俊一郎・加藤久遠・加藤淳平・菅正彦・木川田喜一・猿渡英之・志方比呂基・篠原宏志・高原弘幸・多田邦尚・田中 茂・福島正巳・山崎秀夫・米田成一・武藤正明

* 退会(8名) 井上照夫・岩熊真紀・内山征洋・梶川正勝・北野国興・榊原忠政・広瀬節子・古津艶子以上を承認。会員現況は以下のとおり

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1987年 9月30日	879	12	6	897
入会	15	0	0	15
退会	8	0	0	8
1987年 12月31日	886	12	6	904

2. 学会賞について

* 日本地球化学会学会賞受賞者選考細則5の一部を次のように変更することが一国会長から提案され承認された。

・・・3月10までに→・・・3月末日までに

* 受賞者選考委員会委員として、本田雅健、北野 康、松尾禎士、増田彰正会員を選出した。委員長は本会評議員である。

3. 日中同位体地球化学宇宙化学セミナーについて
増田評議から本会による同セミナーの後援の依頼があり承認した。

4. AGUからの国際会議開催の協力依頼について
1990年8月AGUが日本で開催予定の国際会議(1990 Western Pacific Geophysics Meeting)について小嶋評議員から説明があり、到着予定の依頼状を見て幹事会が対応することとした。(以上)

編集者 鈴木 款 〒305茨城県つくば市長峰1-1 気象研究所地球化学研究部 電話 0298 (51) 7111
発行所 日本地球化学会 〒113 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内 電話 東京 03 (817) 5801

日本地球化学会ニュース

No. 115

1988. XI. 30

1989年度日本地球化学会春季シンポジウム

主催 日本地球化学会

日時 1989年4月10日(月) 9:30~17:00

会場 東京大学山上会館

講演

午前の部 9:30~12:30

一般講演 10件程度公募します!

ポスターセッション

(申込多数の場合には調整させていただきます。)

午後の部 13:30~17:00

招待講演 数件

講演申込み締切: 1989年1月30日(月)

申込み後講演原稿用紙をお送りします。

申込み先: 〒153 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学教養学部

綿抜邦彦

03-467-1171内線629

懇親会: 東京大学山上会館 17:30~19:30

詳細は次号ニュースでお知らせします。

奮ってご参加下さい。



1989年1月25日までに講演申込み先にお送り下さい。

シンポジウム「隕石と太陽系の起源」

シンポジウム“METEORITES AND THE ORIGIN OF THE SOLAR SYSTEM”を重点領域研究「原始太陽系と惑星の起源」総括班と日本地球化学会の共催により、1989年4月11日（火）に東京大学山上会館において開催いたします。1988年4月25日に通信総合研究所で開催されたシンポジウム同様、惑星科学に御関心のある方々の参加を期待いたします。

発表される方は、4 pages以内のabstract (A 4版, 1 inch margin, Title, Name + Affiliation, the text, in English)を1月31日（火）までに御郵送下さい。

また、参加希望の方は下記まで御連絡下さい。
世話人：増田 彰正（東京大学理学部化学教室）

連絡先：〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学理学部化学教室

清水 洋

Tel 03-812-2111 ext.4350

Fax 03-814-2627

○ Sixth International Symposium on Water-Rock Interaction (Malvern, England)に参加する若手研究者への旅費援助について

標記国際集会WRI-6が1989年8月3日から8月8日まで6日間連合王国のMalvernで開催されます。(実行委員長：Dr.W.M.Edmunds, British Geological Survey, Wallingford, Oxon OX10 8 BB, U.K.)。シンポジウムのテーマは1st Circularにある通りです。8月9日より12日まではイギリス南西部を訪れ、化石地熱地帯、花崗岩-水反応, hot-dry-rock, 堆積, 土壌および海洋地球化学をテーマに巡検旅行をする計画です。Extended abstracts の締め切りは1989年2月28日です。

WRI国内委員会ではWRI-6に出席して論文を発表する若手研究者7名以内に旅費・滞在費として30万円を援助する用意がありますので、援助を希望される方

は奮ってご応募下さい。なお旅費贈呈者の選考は下記の要領により行います。

記

1. 応募資格：WRI-6実行委員会によってアブストラクトが受理された論文の第一著者で、1949年4月1日以降出生の方に限ります。
2. 審査方法：WRI-6発表予定論文を英語で発表(討論を含めて20分)していただき、選考委員会(松尾 禎士(委員長), 関陽太郎, 武内 寿久彌, 酒井 均ほか6名)が審査・決定します。日時は1989年4月10日(月)午後1時30分より、場所は東京大学理学部化学教室(Rm.1401)です。審査結果は4月12日以降に応募者に直接伝えます。
3. 応募方法：応募希望者は1989年2月28日までに、氏名、年令、所属を日本語で明記したExtended abstractを、下記に郵送して下さい。First Circularその他、この件に関する問い合わせも下記宛をお願いします。

〒682-02 鳥取県東伯郡三朝町山田827
岡山大学地球内部研究センター
日下部 実(Tel.0858-43-1215)



生命と環境を育む土
第14回 国際土壌科学会議
1990年8月12-18日, 国立京都国際会館
第1次アナウンスメント予備登録のご案内

国際土壌科学会議の準備は着々と進んでまいりました。ここに日本土壌肥科学会および関係各位に第1次アナウンスメントをお届けし、あわせて会議参加の予備登録をお願いする次第です。とじ込みの予備登録申込書(ハガキ)に見学旅行参加、発表希望などの必要事項をご記入のうえ、お早目に予備登録をお済ませください(締切は1989年2月末日)。

1. 会議のセッション

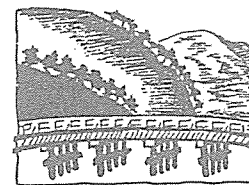
会議は、(1)全体講演、(2)シンポジウム、(3)ポスターセッションの3部構成とします。一般発表はすべてポスターセッションで行います。シンポジウムは各部門から提案された下記の約40の課題について行うこととし、招待論文と公募論文から構成します。

1.1 全体講演(招待演者)

テーマと演者は、各部門長と連絡をとりながらプログラム委員会で検討中です。

1.2 シンポジウム

シンポジウムの課題(案)は次のとおりです。各課題について5-6編の論文(うち1編は招待論文)が発表される予定です。シンポジウム(公募論文)の発表希望者には、あらかじめ要旨を提出していただき、採否はシンポジウムの課題との適合性を審査し、決定します。審査の結果、シンポジウムにはいらぬものについてはポスターセッションでの発表をお願いし、その要旨は要旨集に掲載します。シンポジウム採用者には1989年後半中に本論文を提出していただき、論文集として印刷します。



1.2.1 シンポジウムの課題

(カッコ内のローマ数字は、各シンポジウムの責任部門を示す。)

- (1) Areal estimation of soil hydrological processes and their application in; a) watershed hydrology; b) efficient use of the irrigation and drainage structures; c) land evaluation; d) environmental protection(I)
- (2) Recent degradation processes in soil physical properties and the reclamation of the anthropogenetically degraded soils(I)
- (3) Problems and opportunities in soil physical management in rice-based cropping systems(I)
- (4) Kinetics of ion sorption processes in soils(II)
- (5) Surface chemistry under varying redox conditions(II)
- (6) Heavy metal accumulation in soil(II)
- (7) Chemical processes at the soil colloidroot interface(II)
- (8) Dynamics of P and N in soils with variable charge colloids(II)
- (9) Soil emissions affecting the environment(II)
- (10) Associative and parasitic microorganisms in the soil biotechnology(III)
- (11) Microbial activity in rhizosphere(III)
- (12) Ecology of soil microorganisms in the microhabitat environments(III)
- (13) Soil biota in tropical soil ecosystems(III)
- (14) Role of biological nitrogen fixation in sustainable agriculture(III)
- (15) Biodegradation of natural and synthetic compounds in soil(III)
- (16) Long-term field experiments on fertilization(IV)
- (17) Responses and tolerance mechanisms of plants to environmental stresses(IV)
- (18) Advances in use of isotopes for researches in soil fertility and plant nutrition(IV)
- (19) Effect of soil properties on plant root growth rate and nutrient uptake(IV)
- (20) New aspects of essential and beneficial elements in plant nutrition(IV)
- (21) Rational use of sewage sludge and city waste materials in agriculture(IV)
- (22) Fertilizer technology and its efficient use for crop

production(Ⅳ)
(23) Nutrient linkage in soil-plant-animal systems under grassland conditions(Ⅳ)
(24) Fate of nitrogen in paddy fields(Ⅳ)
(25) Active role of plant roots in controlling rhizosphere(Ⅳ)
(26) Recent development in soil classification(Ⅴ)
(27) New methods of soil inventory and cartography for ecosystem development(Ⅴ)
(28) Soil geography in eastern Asia(Ⅴ)
(29) Methodology to evaluate vulnerability to soil degradation(Ⅴ)
(30) Historical, philosophical and sociological aspects of development in soil science(Ⅴ)
(31) Characterization and role of organic matter in different soils(Ⅴ)
(32) A 1:1 million world soils and terrain digital data-base:its structure,development and use(Ⅴ)
(33) Global soil changes and their dynamics in a changing environment(Ⅴ)
(34) Application of micromorphology to agronomic and environmental sciences(Ⅵ)
(35) Conservation-effective management requirements for soils in contrasting agroecological zones(Ⅵ)
(36) Evaluation of the changes in soil properties as related to various management practices(Ⅵ)
(37) Pedotechnical approach to present day soil tillage and field traffic problems(Ⅵ)
(38) Movement and accumulation of salts and optimal irrigation scheduling(Ⅵ)
(39) Salt-affected soils and effective methods of their utilization under different ecological/environmental conditions(Ⅵ)
(40) Irrigation, drainage and management of heavy clay soils(Ⅵ)
(41) Occurrence, structure and properties of soil minerals(Ⅶ)
(42) Soil mineralogy, soil management and soil classification(Ⅶ)
(43) Physical, chemical and mineralogical characteristics of ando soils(Ⅶ)

2. 予備登録の方法

「予備登録申込書(ハガキ)」に必要事項を記入し、下記の第14回国際土壌科学会議事務局宛てにお送りください。控えとして、必ず予備登録申込書のコピーを取っておいてください。締切は1989年2月末日です。なお、部門の番号は次のとおりです。

I: 土壌物理学, II: 土壌化学, III: 土壌生物学, IV: 土壌肥沃性と植物栄養, V: 土壌生成・分類・調査, VI: 土壌工学, VII: 土壌鉱物学

予備登録をされた方の方に本登録の用紙、発表要旨用原稿用紙、原稿作成要領等をお送りし、ご案内申し上げます。(要旨原稿の締切は1989年6月末日の予定です。)

連絡先: 第14回国際土壌科学会議事務局

(担当者: 福土定雄・大場千恵子)

〒113 東京都文京区本郷6-26-10-202

日本土壌肥科学会内

電話 03-815-6720

Fax. 03-815-6018

環境科学シンポジウム・環境科学会1988年会

主催: 文部省科学研究費補助金重点領域研究「人間-環境系の変化と制御」総合班環境科学会

日時: 昭和63年11月30日(水) - 12月2日(金)

会場: 東京虎ノ門パストラル (東京農林年金会館)

TEL (03) 432-7261 (大代表)

交通: 地下鉄銀座線「虎ノ門」駅下車徒歩15分, 地下鉄日比谷線「神谷町」駅下車徒歩5分

プログラム:

I. シンポジウム 4 (重点領域研究主催)

- | | |
|-------------------|----------|
| 1. 大都市湾岸域の開発と環境保全 | 11月30日午後 |
| 2. 磁場・電場の生体影響 | 12月1日午前 |
| 3. 有機ハロゲン化合物 | 12月1日午後 |
| 4. 重金属ストレスと生物 | 12月2日午前 |

II. 一般講演 4会場にて並行して開催
午前はすべて9時30分開始です。

プログラムの詳細は環境科学会誌, 第1巻第2号に掲載(10月発行予定)

参加: 公開。参加費 3,000円(当日会場にて受付)

問い合わせ先: 〒305 茨城県つくば市天王台

筑波大学大学院環境科学研究科内

環境科学会年会実行委員会

実行委員長 山中 啓

TEL (0298) 53-6598

科学技術情報流通技術基準(SIST)

普及説明会開催のご案内

●日時/昭和63年10月7日(金) 10:00~17:00

●場所/日本科学技術情報センター

科学技術庁科学技術振興局

日本科学技術情報センター

講演テーマ及び講師(予定)

10:00~10:05 開会あいさつ

10:05~10:45

我が国における科学技術情報政策と標準化事業について

鈴木治夫(科学技術庁科学技術振興局科学技術情報課長)

基準説明

10:45~12:15

① SIST 07 学術雑誌の構成とその要素

② SIST 08 学術論文の構成とその要素

③ SIST 09 科学技術レポートの様式

④ SIST 12 会議予講集の様式(案)

竹内 壽(国立国会図書館専門調査員(調査及び立法考査局))

13:15~14:45

⑤ SIST 03 書誌的情報交換用レコードフォーマット(外形式)

⑥ SIST 04 書誌的情報交換用レコードフォーマット(内形式)

⑦ SIST 10 書誌データの記述

神尾達夫(日本経済新聞社データバンク局記事情報部長)

15:00~16:20

⑧ SIST 01 抄録作成

⑨ SIST 02 参照文献の書き方

⑩ SIST 05 雑誌名の略記

⑪ SIST 06 機関名の表記

山崎 浩(日本科学技術情報センター情報部副主任情報員)

16:20~16:45

⑫ SIST 11 数値型情報交換用レコード構成(案)

小野寺夏生(日本科学技術情報センター企画室調査役)

●日時/昭和63年10月7日(金) 10:00~17:00

●場所/日本科学技術情報センター7階ホール

〒100 東京都千代田区永田町2-5-2

電話(03) 581-6411(代表)

●参加費/無料

(ただし、テキスト代として

実費2,000円申し受けます。)

●主催/科学技術庁科学技術振興局・

日本科学技術情報センター共催

●定員/120名

●問合せ先/日本科学技術情報センター技術管理室

〒100 東京都千代田区永田町2-5-2

電話(03) 581-6411(内線432)

又は

日本科学技術情報センター東京支所

〒102 東京都千代田区平河町2-8-2

31藤ビル3F

電話(03) 230-1341(代表)

※

第25回 Chemical Abstracts 利用法講習会

主 催：化学情報協会 共催

Chemical Abstractsの効率的な使い方を実例を挙げながら説明いたします。

日 時：昭和63年12月6日（火）

10時から16時

場 所：学士会東大分館

（東京都文京区本郷7-3-1）

受講料：（テキスト代含む）一般21,000円，大学教職員，学生，化学情報協会賛助会員・維持会員（1名まで）6,500円，化学情報協会正会員の学協会会員14,000円

定 員：20名

申込先：化会情報協会講習会受付係
（Tel.03-816-3462）

『地球—ダイナミックな躍動』プログラム案

昭和64年1月30日（月）経団連ホール

A. 挨拶（9：50～10：00）

第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会
文部省

B. 地球内部に於ける物質移動と変化（10：00～17：15）

司 会 東京工業大学教授 丸茂文幸
京都大学教授 坂野昇平

1. 電子顕微鏡を通して見る地球と宇宙
大阪産業大学教授 森本信男
2. コンピューターで作る水晶とその仲間
岡山大学教授 松井義人
3. 顕微鏡下でマグマを見る
東北大学名誉教授 砂川一郎
4. 火山はどうしてできるか
東京大学教授 久城育夫
5. 地球内部の動きを把握する
東京大学教授 熊澤峰夫
6. ダイヤモンドの年代：その惑星科学的意義
東京大学教授 小嶋 稔

昭和64年1月31日（火）

C. 地質学的時間を測る（10：00～12：00）

司 会 東京大学教授 小嶋 稔

1. 微量炭素物質の放射性酸素から年代を測定する
名古屋大学教授 中井信之
2. 地質年代を測定する様々な時計
東京大学教授 増田彰正

D. 地殻の表層・水の動き（13：00～17：15）

司 会 岡山理科大学教授 奥田節夫

1. 琵琶湖底に秘められた変遷の歴史
京都大学教授 堀江正治
2. 地下水の挙動
筑波大学教授 榎根 勇
3. 古地震の復元 —地形学的方法によるアプローチ—
横浜国立大学教授 太田陽子
4. 地球史の中の有機物を探る
東京都立大学教授 石渡良志

昭和64年2月1日（水）

E. 変化する地球と人間とのかかわり（10：00～17：15）

司 会 京都大学教授 久保寺章

京都大学名誉教授 国司秀明

東京理科大学教授 玉井康勝

1. コンピュータの中の地図
お茶の水女子大学講師 久保幸夫
2. 人工衛星による地球環境の監視
東京大学教授 高木幹雄
3. 熱帯の自然と人間居住 —三大陸比較の視点から—
広島大学教授 藤原健蔵
4. 水界生物の相互作用
—メソコスム（隔離水界）による実験的解析—
愛知大学教授 西篠八束
5. 高温岩体からの熱エネルギーの抽出
東北大学教授 阿倍博之
6. 地球内部の熱と物質の活用
東北大学教授 高橋秀明

32nd IUPAC Congress

Stockholm 2-7 August 1989

Organized by the Swedish National Committee for Chemistry

The Royal Swedish Academy of Sciences

Section I. Large-Scale Separation of Biological Macromolecules, Cells and Particles

Section II. Atmospheric and Marine Chemistry

Section III. Chemical Communications and Chemical Interaction between Organisms

Section IV. Solid State Chemistry-Frontiers in the Chemistry of Inorganic Materials

Section V. Structure and Dynamics of Macromolecules

Section VI. Electron Transfer Reactions

Section VII. Chemistry and Biochemistry of Bile Acids

General Information

Contributions Oral and Posters

Oral contributions will be considered for all sections except section V.

Poster contributions to all sections are invited. Posters on subjects not specifically covered by the sections are also most welcome (see page 2).

Detailed information and an abstract form will be included in the third circular.

Third circular

Please note that you must return the reply card in order to get the third circular. This will be distributed in December 1988.

Entry visas Important

IUPAC sponsorship implies that entry visas will be granted to all bona fide chemists provided application is made not less than three months in advance. If a visa is not granted one month before the meeting, the IUPAC Secretariat should be notified without delay by the applicant.

Registration fee

It is expected that the fees for the Congress will be 2,000 SEK for fullmeeting participants, with a concession fee of 1,000 SEK for students and 750 SEK for accompanying persons. For IUPAC affiliates the fee will be reduced by 10%.

Payment will be expected alongside completion of the application forms accompanying Circular no 3, due in December 1988.

Accommodation

A number of variously priced hotel rooms, ranging from luxury class to student accommodations, have been reserved from August 1 to August 7. As only a certain number of hotel rooms have been reserved in each category, the Stockholm Convention Bureau will deal with room reservations on a "first come, first served" basis. Upon receipt of the application form, which will be included in the third circular, with full details of the arrangements, the Stockholm Convention Bureau will be able to confirm your hotel reservation. There are a number of camping sites in Stockholm. Further information will be available in the third circular.

Social programme

The following programme is planned:

Tuesday, August 1 : Informal reception

Wednesday, August 2 : Reception at the Stockholm City Hall

Saturday, August 5 : Concert at the Stockholm Concert Hall

Sunday, August 6 : Banquet at the Stockholm City Hall

There will also be a special programme for accompanying persons.

This program will include tours to interesting places in Stockholm.

Exhibition

An exhibition of scientific equipment, books etc is planned. Companies interested in contributing to the exhibition are invited to contact Eventor, c/o Stockholm Convention Bureau, P.O. Box 6911, S-102 39 Stockholm, Sweden.

理工学における同位元素研究発表会開催要領

昭和38年10月16日

第1回理工学における同位元素
研究発表会運営委員会

1. 名 称

第(1, 2, ……)回理工学における同位元素研究
発表会

the (First, Second, … …) Annual Meeting on
Radioisotopes in the physical Sciences and Industry.

2. 目 的

理工学における同位元素および放射線の利用の技術
を中心とした研究, およびその技術の基礎となる研究
の発表と討論を行い, 関係専門分野間の知識と技術の
交流を図り, わが国の科学技術の発展に寄与する。

3. 主 催 者

関係学・協会の共同主催による。

4. 開 催

毎年1回

5. 発表者

各主催学・協会の規定または慣例に従う。

6. 講演要旨集

予め講演要旨集を発行し, フルペーパーの報文集は
特に発行しない。

なお, 日本アイソトープ協会学術学関誌
「RADIOISOTOPES」には発表会の発表論文にかぎり,
同協会会員以外でも投稿することができる。

7. 運 営

運営委員会を設けて具体的詳細の立案および実施に
当る。運営委員会は主催学・協会がそれぞれ委嘱する
各1名の委員をもって構成する。

この他, 運営委員会に関する事項は別に定める。

8. 経 費

主催学・協会が醸出する共催分担金および広告料金
その他の収入による。

共催分担金の額についてはこの会の各回毎に定め
る。

9. 事 務

日本アイソトープ協会において行う。

求人広告

会社概要

フィニガン・マットは世界的によく知られた質量分
析計のメーカーです。有機測定用GC/MS高性能トリ
プルステージカドラボール質量分析計 高性能2重収
束質量分析計, 気体同位体質量分析計, 表面電離形同
位体質量分析計等の製造販売を行っております。日本
支社では上記製品の販売, 技術サービスを行っており
ます。

職 種

- ・セールス エンジニア
- ・プロダクト スペシャリスト
- ・サービス エンジニア

待 遇

経験, 能力等を考慮して, 優遇, 完全週休2日制
昇給年1回, 賞与年2回(実績6ヶ月以上)

応 募

希望職種明記の上, 履歴書(写真付)郵送のこと。

送 付 先

東京都千代田区平河町2-7-1 塩崎ビル
フィニガン・マット・インスツルメンツ・インク
(TEL)03-221-1001



1988年度第2回日本地球化学会評議員会議事録(案)

日 時: 1988年6月4日 17時~20時30分

場 所: 赤門学士会館

出席者: 一國雅巳会長, 石渡良志, 大隈多加志, 小倉
紀雄, 梶原良道, 兼岡一郎, 木越邦彦, 日下
部 実, 鈴木 款, 高野穆一郎, 田中 剛,
角皆静男, 坪田博行, 野津憲治, 増田彰正,
松葉谷 治, 松久幸敬, 柳 哮, 各評議員

I. 前回の議事録を承認した。

II. 報告事項

1. 幹事会(高野評議員)

*5月28日17時~20時の間に, 東京大学教養学部にお
いて開かれた。一國雅巳会長, 綿拔邦彦副会長以下
4名の幹事が出席し, 次回評議員会議題の整理検討
をおこなった。

2. 庶務(高野評議員)

*62年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」実
績報告書を3月31日に文部省に提出した。

*5月10日に文部省より学術定期刊行物補助として
G.J.に対し134万円を交付する旨内定通知があった
ので文部省に対し交付申請書を提出した。

*日本学術会議員推薦管理会より3月18日付けで本
会が推薦した増田彰正評議員を第14期日本学術会議
会議員候補者として認定する旨の通知があった。

*前項に関して5月24日に開かれた推薦委員会におい
て日本応用地質学会推薦の池田俊雄氏が, また補欠
として地学団体研究会, 第四紀学会, 日本地質学会
推薦の松井 健氏が選出された旨一國雅巳推薦人か
ら補足がなされた。

*1988年度日本地球化学会賞, 奨励賞候補者の募集に
対して三件の応募があったので選考委員会に送付し
た。

3. 会計(野津評議員)

*1987年度決算報告書について説明があり, 鳥居鉄也
監事からこの報告書は適正であるとの報告がなされ
た。

4. 編集

(松久評議員)

*G.J.Vol.22 No.1は原著5編と1987年度会発表講
演題目リストを含み次週に印刷される見込みであ
る。

*G.J.Vol.22 No.2以降の投稿原稿は10編あり, 内
訳は受理3編, 査読中5編, 審議中2編である。現
状では投稿数が危機状態にあるので投稿を勧誘して
ほしい。

(石渡評議員)

*『地球化学』22巻1号は現在初校が終了した。2週
間以内に発行予定である。22巻2号は10月頃に発行
予定である。投稿の勧誘をお願いしたい。

5. ニュース(鈴木評議員)

*ニュース112, 113号はすでに発行済みである。内容
の充実のために各方面から情報を寄せられたい。

6. 行事

*1988年度年会(広島大学)では三つの課題討論と一
般講演, ポスターセッションを設ける予定である。
詳細はニュース113号に掲載した(坪田評議員)。

*1988年度春期シンポジウムは4月7日東京大学教養
学部において開催され, 60余名の参加者と, 20名の
懇親会出席者を得て盛会の内に終了した(綿抜副会
長)。

III. 議事

1. 入退会

*入会(9名)大沢信二・大下克巳・小林憲正・佐久
間敏明・三條和博・関 陽児・豊田 新・藤原祺多
夫・三田直樹

*退会(9名)小倉久子・越智久尚・後藤達夫・近藤
秀治・下方鉦蔵・鈴木 昌・富山千里・湊 秀雄・
八木健三

以上を承認した。会員現況は以下のとおりである。

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1988年1月1日	886	12	6	904
入会	9	0	0	9
退会	9	0	0	9
1988年4月30日	886	12	6	904

*第一線を退かれた会員の退会について, 単に承認す
るだけでよいかとの疑問が出され, このことについ
て幹事会で検討することとなった。

2. 学会賞について

木越学会賞選考委員会委員長から, 今回は学会賞に
ついては該当者無し, 奨励賞については原田 晃会員
(北海道大学)を推薦する旨の答申が一國会長になさ

れたとの報告と経過説明があり承認された。また当選考委員会は今回で解散し、1989年度委員を早急に決定して欲しいとの申し入れがあり、受賞者選考方法を含めて幹事会で検討することとした。3. AGU関係

先にAGUから打診のあった「1990 Western Pacific Geophysics Meeting」への参加問題について、国内他学会の対応状況に付いての報告がなされ、地球化学会としては国内関連学会と共同歩調をとりながら応分の事をするという方向で対応し、煮詰った段階で担当者を決めることとした。それまでの学会としての内外への対応には庶務担当評議員が当たることとした。

4. 学会会議関係

第14期学会会議研究連絡委員会の発足に当たり本学会に委員推薦依頼がある予定であるので、次の会員を推薦することとした。

鉱物研連：松久幸敬、陸水学研連：小倉紀雄、海洋学研連：酒井 均、地球化学・宇宙化学研連：角皆静男・増田彰正・酒井 均・石渡良志・野津憲治の各会員をこの順に推薦する。酒井会員の重複が不都合の時は会長に人選を一任することとした。

5. 年会・シンポジウム関係

1989年度春期シンポジウムは4月10日に東京大学山上手会館で、また年会は東京大学で行うことが決定された。それらの詳しい内容、日程などは次回評議員会で決定することとした。

6. その他

*ESR応用計測研究会および日本宇宙生物科学会からそれぞれ研究発表会、第二回大会への本学会の協賛の依頼があり承認した。

*G.J.に年会の講演題目を掲載する際、講演申し込み時と発表時で題目、発表者が異なることがあるとの指摘がなされ、臨時に講演要旨に英文による題目、発表者名を付けることを試みることにした。

1987年度決算報告書

収 支 決 算 書

(自 1987年1月1日 至1987年12月31日)

収入の部

	円 (予算, 円)
1. 会費	6,881,613 [6,600,000]
正会員	6,057,000
学生会員	280,000
賛助会員	195,000
海外会員	291,613
入会金	58,000
2. 刊行物売上	4,621,714 [4,300,000]
別刷	581,782
Back No.	4,039,932
3. 広告料	210,100 [300,000]
4. 助成金	1,280,000 [1,350,000]
5. 雑収入	21,152 [30,000]
6. 前年度名簿積立金	250,000 [250,000]
7. 前年度基本財産充当引当金	500,000 [500,000]
8. 国際会議預金利息	0 [0]
9. 前年度繰越金	10,087,360 [3,200,000]
計	23,851,939 [16,530,000]

支出の部

	円 (予算, 円)
1. 事業費	
出版費	9,049,096 [9,950,000]
印刷	7,443,300
編集	900,000
発送	705,796
行事費	305,000 [270,000]
学会賞経費	13,000 [100,000]
委員会活動費	100,000 [0]
名簿積立金	0 [0]
名簿作成費	610,070 [600,000]
会員業務委託費	1,292,120 [1,600,000]
会員業務郵税	324,283 [200,000]
計	11,693,569 [12,720,000]

2. 管理費

庶務費	200,000 [200,000]
会議費	119,282 [270,000]
通信費	9,600 [30,000]
旅費	176,000 [300,000]
選挙費	32,000 [80,000]
雑費	46,890 [80,000]
会誌保管料	171,600 [171,600]

小計 755,372 [1,131,600]

3. 予備費	0 [500,000]
4. 基本財産充当引当金	500,000 [500,000]
5. 次年度繰越金	10,902,998 [1,678,400]

計 23,851,939 [16,530,000]

(注)

*：委員会活動費の10万円は予備費より充当。

**：次年度繰越金には1987年度発行出版物の出版費未納分の約300万円を含む。

貸借対照表

(1987年12月31日現在)

資産の部

現金	1,388,797円
預金	7,714,215
学会事務センター	6,041,986

計 15,144,998

負債・正味財産の部

負債	4,242,000円
前受会費	3,742,000
名簿積立	0
基本財産充当引当金	500,000
正味財産	10,902,998

計 15,144,998

1988年度会計中間報告 (1988年6月30日現在)

収入の部

科目	金額 (円)	予算額
1. 会費収入	6,026,700 (6,600,000)	
2. 刊行物売上	2,307,404 (4,600,000)	
3. 広告料	206,100 (200,000)	
4. 助成金	0 (1,300,000)	
5. 雑収入	19,573 (20,000)	
6. 前年度名簿積立金	0 (0)	
7. 前年度基本財産充当引当金	00,000 (500,000)	
8. 国際会議預金利息	0 (0)	
9. 前年度繰越金	10,902,998 (5,500,000)	
計	19,962,775 (18,720,000)	

支出の部

科目	金額 (円)	予算額
1. 事業費		
1. 1. 出版費	5,513,712 (9,650,000)	
会誌等印刷費	3,877,300 (7,700,000)	
編集費	1,200,000 (1,200,000)	
発送費	436,412 (750,000)	
1. 2. 行事費	409,000 (300,000)	
1. 3. 学会賞経費	38,000 (40,000)	
1. 4. 委員会活動費	0 (100,000)	
1. 5. 名簿積立金	0 (300,000)	
1. 6. 名簿作成費	0 (0)	
1. 7. 事務委託費	0 (1,600,000)	
1. 8. 会員業務郵税	19,013 (200,000)	
小計	5,979,725 (12,190,000)	

215-314

日本地球化学会ニュース

No. 116

1989. Ⅲ. 10

1989年度日本地球化学会春季シンポジウム

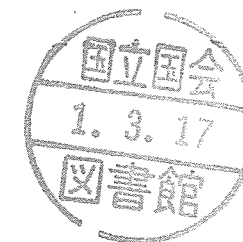
主催 日本地球化学会

日時 1989年4月10日(月) 10:00~17:15

会場 東京大学山上会館(地図参照)

(電話03-812-2111内線2343)

コンビーナー 線技邦彦・高野穆一郎・小倉紀雄



プログラム

一般講演 (10:00~12:00)

1. 固相・水溶液相間の希土類元素分配係数にみられるテトラド効果 10:00~10:20
鍵裕之・増田彰正・高野秀路・堂本幸輝(東大理)
2. 温泉の泉質変化とその鉱物沈殿形成への影響 10:20~10:40
佐々木信行(香川大教育)
3. 金属鉱床の元素地球化学 10:40~11:00
—A Global System Control—
梶原良道(筑波大地球科学)
4. 都市における物質循環の機構の解釈 11:00~11:20
半谷高久(MV研) 秋山紀子(青山女子短大)
5. 沢水中のBr/Cl比の変化と土壌の役割 11:20~11:40
鶴見実・一國雅巳(東工大総合理工)
6. N_2O および NO_3^- の窒素同位体比と生成速度からみた N_2O の地球化学的循環 11:40~12:00
吉田尚弘・平野光浩(富山大理)

ポスターセッションおよび昼食 12:00~14:00

特別講演 (14:00~17:15)

1. ウラン・トリウム系列核種と海洋での物質循環 14:00~14:40
原田晃(北大水産)

2. 大気中の微量気体の挙動と地球環境への影響

- 巻出義紘(東大理) 14:40~15:20
3. 鉛同位体による日本の青銅文化の流れ 15:20~16:00
馬淵久夫(国立文化財研)
- 休憩 16:00~16:15
4. 地球化学に望む 16:15~17:15
浅田敏(東海大)

ポスターセッション (12:00~14:00)

- P-1. 南極水素の総合解析 角田晋也, 綿拔邦彦(東大教養)
- P-2. 接触変成作用における流体の移動 —安定同位体による新しい証拠—
有田陽子, 和田秀樹(静岡大理)
- P-3. 地球化学関連有機物分析への熱分解ガスクロマトグラフィー・質量分析法の応用
山本修一(創価大・教育) 津田文治, 石渡良志(都立大・理)
- P-4. 都市大気中の低分子ジカルボン酸の季節変化
河村公隆, 幾島浩一(都立大・理)
- P-5. ラドン濃度変化と地震
五十嵐丈二, 脇田宏, 野津憲治, 佐野有司(東大・理)
- P-6. ICP質量分析計による地球化学試料の分析

2. 管理費		
2. 1. 庶務費	200,000 (	200,000)
2. 2. 会議費	81,040 (	200,000)
2. 3. 通信費	1,200 (	30,000)
2. 4. 旅費	225,000 (	300,000)
2. 5. 選挙費	0 (	0)
2. 6. 雑費	4,490 (	80,000)
2. 7. 会誌保管料	0 (	171,600)

小計 511,730 (981,600)

3. 予備費	0 (	500,000)
4. 基本財産充当引当金	0 (	500,000)
5. 次年度繰越金	 (	4,548,400)

計 6,491,455 (18,720,000)

支出の部	科目	金額（円）	前年度予算額	増減
1. 事業費				
1.1. 出版費		9,800,000	（ 9,650,000）	150,000
	会誌等印刷費	7,800,000	（ 7,700,000）	100,000
	編集費	1,200,000	（ 1,200,000）	0
	発送費	800,000	（ 750,000）	50,000
1.2. 行事費		500,000	（ 300,000）	200,000
1.3. 学会賞経費		50,000	（ 40,000）	10,000
1.4. 委員会活動費		150,000	（ 100,000）	50,000
1.5. 名簿積立金		0	（ 300,000）	△300,000
1.6. 名簿作成費		600,000	（ 0）	600,000
1.7. 事務委託費		1,600,000	（ 1,600,000）	0
1.8. 会員業務郵税		200,000	（ 200,000）	0
	小計	12,900,000	（12,190,000）	710,000

1989年度予算案

収入の部			
科目	金額 (円)	前年度予算額	増減
1. 会費収入	6,800,000 (	6,600,000)	200,000
2. 刊行物売上	4,600,000 (	4,600,000)	0
3. 広告料	300,000 (	200,000)	100,000
4. 助成金	1,300,000 (	1,300,000)	0
5. 雑収入	20,000 (	20,000)	0
6. 前年度名簿積立金	300,000 (	0)	300,000
7. 前年度基本財産充当引当金	500,000 (	500,000)	0
8. 国際会議預金利息	0 (	0)	0
9. 前年度繰越金	9,500,000 (	5,500,000)	4,000,000
計	23,320,000 (18,720,000)	4,600,000	

2.管理費			
2.1.庶務費	200,000 (	200,000)	0
2.2.会議費	300,000 (	200,000)	100,000
2.3.通信費	30,000 (	30,000)	0
2.4.旅費	600,000 (	300,000)	300,000
2.5.選挙費	80,000 (	0)	80,000
2.6.雑費	80,000 (	80,000)	0
2.7.会誌保管料	171,600 (	171,600)	0
小計	1,461,600 (	981,600)	480,000
3. 予備費	500,000 (	500,000)	0
4. 基本財産充当引当金			
	500,000 (	500,000)	0
5. 次年度繰越金			
	7,958,400 (	4,548,400)	3,410,000
計	23,320,000 (18,720,000)		4,600,000

編集者 鈴木 欸 〒305 茨城県つくば市長峰1-1 気象研究所地球化学研究部 電話 0298 (51) 7111
 発行所 日本地球化学会 〒113 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル(4F)
 日本学会事務センター内 電話 東京 03 (817) 5801